

阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践

—「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して—

藤仲孝司, 中御門敬教

序 文

ジターリ (Jitāri, dGra las rnam par gyal ba →白崎説では A.D. 960-1040¹⁾) は、顕密に多くの著作を残した後期インド仏教の大学匠である。彼は哲学的にはナーガールジュナ、シャーンタラクシタ、カマラシーラの系統のいわゆる瑜伽行中観派の論師である。論理学においてはダルマキールティを重要視し、幾つかの新機軸を打ち出した。インド仏教四大学派の学説綱要書も残している。実践面ではナーガールジュナ、シャーンティデーヴァの影響を受けており、菩薩戒に関する幾つかの著作を残した。密教においては母タントラ系統の人であった。チベットに入って仏教中興の祖となったアティーシャの師の一人でもあり、チベット仏教にも影響を与えている²⁾。

さて、本論では蔵訳に残されている、ジターリの阿弥陀仏に関する三典籍を翻訳、研究する。すなわち、

- *Aparimitāyuhṣṭotra* (Tib. *Tshe dpag med la bstod pa*, 『無量寿讃』, 以下『讃』)³⁾,
- *Aparimitāyurjñānasādhana* (Tib. *'Phags pa Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i sgrub thabs*, 『無量寿智の成就法』, 以下『成就法』)⁴⁾,
- *Aparimitāyurjñānavidhi* (Tib. *Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i cho ga*, 『無量寿智

1) cf. 白崎 [1981a] pp. 345(4)-342(7)

2) 蔵訳では Jetāri 等と表記されることもあるが、正しくは Jitāri であるべきことが、白崎 [1981a] pp. 348(1)-345(4) に指摘されている。そこには、「(Jetāri と Jitāri という呼称について) Tibet 語の E と I の発音はほとんど同じで区別出来ず、Jitāri と Jetāri の発音はほとんど同じである。～」と述べられている。本稿の試訳箇所においては、本文中の表記 (Dze tā ri) をいかにして、一応「ジェーターリ」と仮訳した。白崎先生は Jitāri の著作全般を詳しく研究、発表されている (cf. 本稿末尾参考文献)。ジターリがアティーシャの師の一人として列挙されることについては、以下を参照のこと。

cf. *Deb ther sngon po*, 四川民族出版社, 1985 年, p. 299 (*The Blue Annals Part one*. by George N. Roerich, Royal Asiatic Society of Bengal, Calcutta, 1949, p. 243)

3) Toh.No. 2698, rGyud, Nu.66b3-67a3, PNo. 3522, rGyud 'grel, Nyu.81a5-81b6

4) Toh.No. 2699, rGyud, Nu.67a3-67b4, PNo. 3523, rGyud 'grel, Nyu.81b6-82b2

の儀軌』, 以下『儀軌』)⁵⁾

の三つである⁶⁾ (上記の三典籍を一括する場合に「ジターリの三部作」または「三部作」と呼ぶ)。

これら無量寿仏に関する文献は, おそらく内容から見て『成就法』を中心とし, その中で使用される『讃』と修法の細かい規定を示す『儀軌』という関連をもった作品ではないかと思われる⁷⁾。これらはチベットでは流行した著作であったようである。ジョンカパの高弟であるケードゥップ・ジェ (mKhas grub dGe legs dpal bzang po, A.D. 1385-1438) の *rGyud sde spyi nam* (以下『タントラ概論』) において, 所作タントラの如来部, 蓮華部, 金剛部の三部に触れて, 「所作タントラの灌頂で現在盛行したものは, 如来部においては~, 蓮華部においてはジターリの無量寿九尊, 金剛部においては~」等といわれている⁸⁾。今回は, ダツェパの無量寿仏に関する成就法を読むことにより, ジターリ流の内容をいくらか明確化できたので, その点をも指摘したいと思っている。ただし今はそれに入る前に, 密教における阿弥陀仏を中心に据えた文献に関する周辺事実から見ていきたいと思う。

まず, *Aparimitāyurjñānahrdaya* (Tib. *Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po zhes bya ba'i gzungs*, 以下「鼓音声ダラニ」)⁹⁾ については, その梵本の存在を明確に確認できなかった。「*Aparimitāhrdaya*」のタイトルをもつ梵本の存在が報告されてはいるが¹⁰⁾, 今回は調査できなかった。漢訳には失訳『阿弥陀鼓音声王陀羅尼經』(T.12, No. 370) が宝積部に収録され, 『陀羅尼雜集』(T.21, No. 1336) 巻第四に「阿弥陀鼓音声王陀羅

5) Toh.No. 2700, rGyud, Nu.67b4-69a4, PNo. 3524, rGyud 'grel, Nyu.82b2-84a6

6) ジターリのこれらの無量寿仏に関する三つの典籍は, すでに白崎 [1980] にその概要が紹介されている。

7) プトン『カンギュル目録』(cf. 西岡 [1981] [1982] [1983]) には, ジターリの三部作中の『儀軌』のみが挙げられている。なお, プトンの高弟ダツェパによる増補版『カンギュル目録』※「種々四部タントラと関係する成就法とマンドラ等の品」, プトン『タントラ目録』には三部作は採られていない。ダツェパはジターリの三部作を利用した『ダツェパ儀軌』の中に『讃』をそのまま引用することから, 『讃』の存在を知っていたことは確かである。よって, 三部作を個々の典籍として受け取らず, 『儀軌』に一括して受け取ったと考えられる。なお, 白崎 [1981a] p. 335 にも「以上の 3Text (ジターリの三部作) は, 一セットのものと考えられるべきものであり, ~」とある。

※ *bsTan bcos 'gyur ro 'tshal gyi dkar chag Yid bzhin gyi nor bu rin po che'i za ma tog* (*The Collected Works of Bu-ston*, PART 28 (SA), edited by Prof. Dr. Lokesh CHANDRA from the Collection of Prof. Dr. Raghu VIRĀ, International Academy of Indian Culture, New Delhi, 1971, 343-574)

8) cf. Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman [1968] pp. 144-145, 高田 [1978] pp. 257-258, 白崎 [1980]

9) チベットでは *Tshe dpag med 'Chi med rnga sgra'i gzungs* (無量寿無死鼓音声ダラニ) という名でも呼ばれている。

10) cf. 塚本, 松永, 磯田 [1989] p. 123, H. Takaoka, *A Microfilm Catalogue of the Buddhist Manuscripts in Nepal*, Vol.1, Nagoya, 1981, CH539

尼」としても収録されている。チベットではカンギュルの、例えばデルゲ版では「タントラ全集」と「陀羅尼集」、北京版では「タントラ」に分類されている¹¹⁾。ケードゥプ・ジェの『タントラ概論』では、いわゆる四部タントラのうちの最下位の所作タントラに分類され、いわゆる「宗要経」すなわち *Aparimitāyurtjñāna* (Tib. *Tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*, 以下主に「宗要経」とともに蓮華部の正尊を説くものとされている¹²⁾。

またチベットでは、この経の十方世界の諸仏が極楽世界の讃を述べたとされる箇所のうち、「仏陀世尊は不可思議、正法もまた不可思議、聖者の僧伽は不可思議、不可思議を淨信する者たちの果報もまた不可思議 (sangs rgyas bcom ldan bsam mi khyab // dam pa'i chos kyang bsam mi khyab // 'phags pa'i dge 'dun bsam mi khyab // bsam mi khyab la dad rnams kyi // rnam par smin pa 'ang bsam mi khyab //)¹³⁾」という部分が、直後の淨土への往生を説く一節を除外した形で、三宝の功德を随念するためによく用いられている¹⁴⁾。ここでは三宝一般の功德を知らしめるものとなっている。

敦煌においては国家的事業として「宗要経」や「大般若経」の書写が行われており、「宗要経」¹⁵⁾にはコータン語訳、ウイグル語訳、さらに西夏語訳、満州語訳まで存在し、

11) Toh.No. 676, rGyud 'bum, Ba.220b5-222b1, PNo. 361, rGyud, Ba.254a2-256a1. Toh.No. 850(5), gZung 'dus, E.62a6-64a2

12) cf. Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman [1968] pp. 122-125, 高田 [1978] pp. 213-214

13) cf. Toh.No. 676, Ba.221a3-4, Toh.No. 850, E.62b4

テンギュルのもの (Toh.No. 676, 850) とは部分的な違いはあるが、三宝に明確に触れている点は同じである。それに対して、漢訳は「所有仏法不可思議。神通現化種種方便不可思議。若有能信如是之事。当知是人不可思議。所得業報亦不可思議 (T12, p. 352b)」とあるように、三宝への言及が不明瞭である。従来この経には中国撰述説もある。『浄土宗大辞典』1 (山喜房仏書林, 1974 年, p. 28) には、明確な根拠は示されないものの「隋の『法経録』に単本失訳として記録しているのが経録上の初見。おそらくは六朝末期の疑経」とある。当経が『陀羅尼雜集』に収録されることを理由とするのかもしれない。なお『陀羅尼雜集』の性格については、落合 [2003] を参照のこと。仮にこの見解にたつのなら、藏訳は単に漢訳からの重訳にすぎないことになる。しかし、チベット訳の奥書にはインドの親教師 Punyasambhava と翻訳師 Ba tshab Ni ma grags の翻訳と明記されている。他にも固有名詞など違いが幾つも見られるので、漢訳から藏訳への直線的な道筋は想定しがたい。両訳を対比した充分な検討が必要ではあるが、中国撰述説は疑わしいと思われる。

14) cf. *Byang chub lam rim che ba*, 青海民族出版社, 1985 年, p. 153. ll.10-13 (Peking ed. No. 6001, Ka.79b3-4)。ツルティム・ケサン先生によると、これは食事の時に唱えるということである。なお、三宝不可思議の文章は、「大乘涅槃経」にもある (cf. 下田 [1993] pp. 291-292)。

15) Toh.No. 674, rGyud 'bum, Ba.211b2-216a7, PNo. 361, rGyud, Ba.243b6-249a5

梵本を含む諸本については、御牧 [1984] や塚本, 松永, 磯田 [1989] 等を参照のこと。現行「宗要経」は一般的には經典形式で説かれているが、梵文写本にはダラニのみのものもある (cf. 塚本, 松永, 磯田 [1989] pp. 120-121)。なお、藏訳大藏経には上記の他に、同名訳 (Toh.No. 675, rGyud 'bum, Ba.216a7-220b5, PNo. 361, rGyud, Ba.249a5-254a2 etc.) が存在する。漢訳大藏経には、失訳『大乘無量寿経』(T.19, No. 936), 『仏説大乘聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経』(T.19, No. 937) が異訳の関係で存在する。また藏訳、漢訳を含む多数の敦煌写本の存在が報告されている (cf. 西岡 [1984] [1985], 山口 [1985] pp. 499-500)。↗

その盛行が知られている。これは同経が本文中に經典書写の功徳を強調しているからである。しかし「鼓音声ダラニ」については、そのような強調もなく、大規模な写経も為されなかったようである。

ㄨ プトン『タントラ目録』の「宗要経」の箇所 (Helmut Eimer [1989] p. 108) には、「om が三つあり、その間に *punya* が一つあるもの」と「om が二つあり、その間に *punya* がないもの」といった二経が挙げられている。om が二つのものと三つのものは、それぞれ '*Og min gyi tshe dpag med* (色究竟天の無量寿 [経] [No. 1253] cf. 西岡 [1983] p. 61), *bDe ba can gyi tshe dpag med* (極楽の無量寿 [経] [No. 1254] cf. *ibid.*, p. 61) と呼ばれている。これは、仏のいる上方の世界を色究竟天と解釈した区別である。ちなみに色究竟天とは、色界のうち最上の天であり、ここで受用身が成仏し、最上の変化身が欲界にいわゆる十二の行い (中国、日本での「八相成道」に相当するもの) の様子を示すとされている (cf. Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman [1968] pp. 17-39, 高田 [1978] pp. 5-15, ツルティム, 藤仲 [2003] pp. 374-375) しかし、ケードップ・ジェは『タントラ概論』 (cf. Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman [1968] pp. 122-125, 高田 [1978] pp. 213-214) において、「[蓮華] 族の正尊のタントラについては、[いわゆる「宗要経」として] 世尊がシェラーヴァスティにおいて文殊師利に対して説かれた。上方の無量寿の名百八、および功徳の讃歎をとまなう。それには om が三つのもの (om gsum ma) が一つと、om が二つ (om gnyis ma) あり om punye punye という真言が揃っていない一つと、二つがある。[プトンは] その二つのうち、一つについて「[西方の] 極楽の無量寿」と言い、一つについては「[受用身が成仏する] 有頂天の無量寿」と言うのは妥当でない。両者とも上方の無量寿のダラニとして説かれたから」と述べている。彼は、その根拠を「宗要経」の「文殊師利よ、上方に無量功徳蔵と名付けられた世間界がある」、すなわち Skt. *asti Mañjuśrī upariṣṭhāyām diśy Aparimitaguṇasamcayo nāma lokadhātuh* に相当する箇所求めたようである。「宗要経」については、鎌田、河村他編 [1988] p. 277 の『大乘無量寿経』(T.19, No. 936) の項目に、「初めに無量功徳聚世界を上方とし、如来の名前を無量智決定王如来としているが、途中で、無量福智世界無量寿浄土と無量寿智決定王如来、無量寿如来となり、後には西方極楽世界阿弥陀浄土となるなどの混乱が見られる」と言われている。個々の名は伝承者、翻訳者の通念において会通されただけのこともかもしれない。しかし、国土を上方とする『タントラ概論』の判断にもかかわらず、これが西方に位置するはずの蓮華部に分類されていることから、混乱は解消されないように思われる。

なお、Helmut Eimer [1989] p. 108, note.1 は、「ラサ版におけるタイトル *Tshe mdo che ba om gsum ma*, [No. 1253] '*Og min gyi tshe dpag med* とを、西岡 [1983] に基づき北京版 No. 361 と同一視するのは仮定にすぎない」と述べている。これは、西岡 [1983] が om が二つのものと三つのものを同一視 (cf. 西岡 [1983] p. 162) することに対して、両者の区別を促す見解である。

(高崎直道編『東京大学所蔵ラサ版チベット大蔵経目録』には、No. 647, *Tshe mdo che ba om gsum ma*, No. 648, *Tshe mdo che ba om gnyis ma* といった名称で「宗要経」が挙げられている。ただし、ラサ版「宗要経」冒頭・末尾に説かれる典籍名を確認すると、二経とも通常の名称が挙げられている)

次に漢訳「宗要経」に目を向けこの問題を考えよう。『大乘無量寿経』(T.19, No. 936)、『仏説大乘聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経』(T.19, No. 937) が異訳の関係で現存する。「宗要経」梵本の名称が *Aparimīṭāyurjñāna* とあるごとく、本来的には「無量寿智仏」を説く經典であるが、『大乘無量寿経』においては、上述のように仏と仏国土の名前にゆれがある。この問題を原典にまで遡り確認する作業は、梵本や敦煌写本 (蔵訳、漢訳) の系統が複雑なこともあり、十分な研究はなされていない。なお、*Mañjuśrīmūlakalpa* (文殊師利根本タントラ) 第二十一品には、釈尊が文殊師利に対して、無量寿智決定王如来所説の文殊の一字心 (*mum*) の真言とその図の描き方と成就法を説かれているという。cf. 「文殊師利儀経の梗概 一主として経の説相について」(『密教文化』1940年, 9,10, 『金剛頂経形成の研究 堀内寛仁論集下』法蔵館, 1996年, pp. 64-66 に再録)

なお日本においては、『往生要集』には往生の諸行を明かす諸経の段にも、「宗要経」の名は見られないが、『阿婆縛抄』第五十二 (cf. 仏書刊行会編 [1912] p. 801 ~) には同経の「無量寿命決定王如来」の項目がたてられており、その尊格が「釈迦か阿弥陀か」議論されている。↗

また日本での「鼓音声ダラニ」の扱い¹⁶⁾を見ると、例えば『往生要集』では、西方極楽浄土を明かし、阿弥陀仏を念じて往生することを勧める諸経の一つとされる¹⁷⁾。往生したいのなら、阿弥陀仏の名号を受持し、随念すべきであり、十日間、一心不乱

結論としては、この尊格名は釈迦の報身と理解されている。さらに『大原法華決』を出典とし、「法花法中決定如来真言、又是寿量品之肝心真言也。次寿量品為真言也。故修此如来法。只釈迦為本尊也」と記し、『妙法蓮華経』「如来寿量品」を真言とし、釈迦を本尊とすることが説かれる。さらに後述して、この真言（如来寿量品）を念じ、無量の寿命を獲得する儀礼も説かれる。つまり、インド・チベットでは阿弥陀仏の異名と理解された無量寿命決定王如来が、日本の天台仏教においては釈迦と理解され、それをもとに儀礼が行われたようである。一つの先例として、「村上御日記云。応和元年辛酉三月九日壬寅。勅始自今夜。於延暦寺法華三昧堂。令座主僧正延昌修無量寿命決定如来法。限七日竟之」(cf. 渋谷 [1943] pp. 39-40 に対応箇所あり)が挙げられている。また、同章では齋然将来の『無量寿命決定王如来経』の中から「是南閻浮提。西方過無量仏土。有世界。名無量功德藏。○超過十方。微妙第一。於○界之中有仏。名無量寿命決定光明王如来」を引用する。これは『仏説大乘聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経』(T19, No. 937a)に対応箇所があり、齋然将来の經典は、『仏説大乘聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経』であることがわかる。これは『大乘無量寿経』が、無量寿智決定王如来の「百八の名号」を憶念、書写、読誦する等の功德を説くと単純に提示する一方で、『仏説大乘聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経』は無量寿決定光明王如来の「名号を百八遍」称念する功德を説くものとして、意味の特定化ないし明確化を計っており、『阿婆縛抄』第五十二は後者に依っているのである。(『阿婆縛抄』第五十二に説かれる引用例(「村上御日記云〜」)が、『天台座主記』にも見られることを、知恩院浄土宗学研究所・伊藤茂樹先生によって御指摘頂いた)

問題箇所の「宗要経」梵文は以下の通りである。

「ye ca khalu punaḥ Mañjuśrīḥ sattvāstasyāparimitāyurjñānasuviniścitatejorājasya tathāgatasyārhatāḥ samyaksaṃbuddhasya nāmāṣṭottaraśataṃ śroṣyanti dhārayiṣyanti vācayiṣyanti. teṣāmāyūṃṣi vivardhayiṣyanti.」(cf. [1916] 池田, p. 552)

この「Skt. nāmāṣṭottaraśataṃ (Tib. de'i mtshan brgya rtsa brgyad)」を、「名号を百八回にわたり」あるいは「百八の名号を」と理解することによって、二つの訳出方法になったようである。しかし、梵本と蔵訳には無量寿智決定王如来の個々の百八の名号は挙げられていない。従来の翻訳や典籍解題類においては単純に「百八の名号」と紹介される向きがある (cf. ibid., p. 558, 録田, 河村他編 [1998] p. 277, etc.)。ちなみに、ケドップ・ジェ『タントラ概論』(cf. Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman [1968] p. 124)に『Om が二つあるもの ('Og min gyi tshē dpag med)』にある真言は中間から欠断しているもので、百八の名号は完全ではないが、別々のタントラが二つあるのではない」とあるのに対し、高田 [1978] p. 214 は「ダラニの文字が百八からなることである」と注記している。

「宗要経」梵本、蔵訳にあるダラニは以下である。

・「Om namo bhagavate Aparimitāyurjñānasuviniścitatejorājāya tathāgatāyārhatē samyaksaṃbuddhāya. tadyathā om puṇye puṇye mahāpuṇye aparimitapuṇye aparimitapuṇye jñānasamḥāropacite. om sarvasaṃskārapariśuddhadharmate gaganasamudgate svabhāvaviśuddhe mahānaya-parivāre svāhā.」(cf. [1916] 池田, p. 552)

・「Om na mo bha ga ba te a pa ra (10) mi ta a yur dznyā na su bi ni shtsi (20) ta te dzo rā dzā ya ta thā ga ta (30) ya a ra ha te sa myak saṃ bud dha (40) ya / ta dya thā / om pu nye pu nye ma (50) hā pu nye a pa ra mi ta pu nye (60) a pa ra mi ta pu nye dznyā na saṃ (70) bha ro pa tsi te / om sarva saṃ skā ri (80) pa ri shud dha da rma te ga ga nas (90) mud ga te swa bhā ba bi shud dhe ma (100) hā na ya pa ri bā re svāhā」(P.No. 361, rGyud, Ba.247b6-7)

(注目すべきことに、「宗要経」蔵訳に見られるダラニの区切りを数えてみると百八ある。しかし、佛教大学総合研究所・松田和信先生にお尋ねすると、梵本からは「名号を百八回にわたり」と理解できるとの御教示を頂いた。大谷大学・ツルティム・ケサン先生に伺うと、やはり同じ名が百八回繰り返されると考えるのが良い、ということである)

16) 台密事相を広く集大成した『阿婆縛抄』の第五十三 (cf. 仏書刊行会編 [1912] p. 825 ~)「阿弥陀」の項目には、「無量寿如来修観行儀軌法一卷」,「金剛頂経観自在王如来修行法一卷」, ↗

に実践するなら見仏、往生できること¹⁸⁾、受持・読誦をもって極楽往生の業とし、往生の諸行を明かす諸経・呪の一つに挙げられている¹⁹⁾。また阿弥陀仏に父、母、子、声聞の弟子衆があることを明かすことでも注目されている²⁰⁾。この『往生要集』での扱いはこの経の全体的な特徴をよく表したものとなっている。他方『選択本願念仏集』では、この経を念仏往生についての諸仏証誠の一例とする『浄土十疑論』の箇所には引用されているが、教判としては傍らに往生浄土を明かす教えの一つとされるようであり、持経と持呪の「読誦大乘の行」のうち持呪の箇所に言及されるにとどまる²¹⁾。なお注釈書には、江戸期の俊彦亮汰 (A.D. 1622-1680) による『阿弥陀鼓音声経鈔』が存在すると言われている²²⁾。

他方、インド・チベットでは「鼓音声ダラニ」は、密教の生成発展の過程においてそのダラニを中心として成就法にも取り入れられていく。「無量寿智 (Skt. Aparimitāyurjñāna, Tib. Tshe dang ye shes dpag tu med pa)」という名は、すでに「鼓音声ダラニ (Aparimitāyurjñānahṛdaya)」と「宗要経 (Aparimitāyurjñāna)」の題名にも見られるが、密教における独立典籍として成就法に関係する文献には、その名を冠したものが蔵訳にいくつか見られる²³⁾。すなわち、

「阿弥陀仏大思惟経」等が挙げられ、後述して「已上傳授経軌。此外秘録所載如左。阿弥陀鼓音声王陀羅尼経一卷。貞元。円覚。梁失訳。阿弥陀経二卷。無量寿経二卷。観無量寿経一卷。阿弥陀経一卷。称讃浄土仏摂受経一卷。後出阿弥陀仏偈経一卷。小無量寿経一卷。随願往生経一卷。是灌頂経十一卷。已上九経宜傍見」とある。記述はわずかあるが、台密における「鼓音声ダラニ」の使用を示す記述ではある。

17) cf. 『浄土宗全書』15, 山喜房仏書林, pp. 64-65

18) cf. ibid., p. 89, 110, 123, 129

19) cf. ibid., p. 130

20) cf. ibid., p. 136 ただし登場人物の名称について、漢訳と蔵訳は完全には一致しない (cf. 小野田 [1987] pp. 94-95)。

21) cf. 『浄土宗全書』7, 山喜房仏書林, p. 4, 62, 65

22) cf. 小野, 丸山編 [1999] p. 55

23) 密教の成就法は『初会金剛頂経』以降のタントラの影響下で成立しているのに、なぜ「無量寿智」という名が用いられるのかは、詳細な論及はなされていないようである。中期の密教を代表する『毘盧遮那現等覚経』(以下『大日経』, 行タントラの代表例), 『初会金剛頂経』(瑜伽タントラの代表例), さらに後者の延長線上に発展した後期密教(瑜伽タントラ, 無上瑜伽タントラ)においては、五仏のうち西方に位置する仏には「無量光」「無量寿」という名が用いられている。先ず『初会金剛頂経』においては、色究竟天における受用身である毘盧遮那仏の成仏から、法身大毘盧遮那如来が自己展開して、中央の仏部(如来部)の大日, 東の金剛部の阿閼(不動), 南の宝部の宝生, 西の蓮華部の無量寿, 北の羯磨部の不空成就という五如来が顕現するという構成 (cf. 頼富 [1990] p. 9, pp. 189-190) をとる。

その中で、阿弥陀仏について、一般にタントラの訳出では漢訳が「無量寿」、チベット訳が「無量光」を好む傾向が見られるが、『大日経』の胎藏界マンドラも例外ではない (cf. ibid., pp. 148-156)。しかし、『初会金剛頂経』の冒頭の金剛界マンドラの出生に関しては「観自在王」「世自在王」の名も使用されるが、後続の『金剛頂タントラ』などの瑜伽タントラ、『秘密集会タントラ』などの無上瑜伽タントラにおいて多く「無量寿」に統一されていく (cf. ibid., pp. 190-194)。またチベットでは図像学の面からは「無量光」と「無量寿」との区別が

- *Aparimitāyurjñānamāṇḍalavidhi* (Tib. *Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i dkyil 'khor gyi cho ga*, 『無量寿智のマンダラ儀軌』, Toh.No. 2141),
- *Aparimitāyurjñānasādhana* (Tib. *Tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba'i sgrub thab*, 『無量寿智の成就法』, Toh.No. 2143),
- *Aparimitāyurjñānasādhana* (Tib. *Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i sgrub thabs*, 『無量寿智の成就法』, Toh.No. 2145),
- *Bhagavadāparimitāyurjñānamāṇḍalavidhi* (Tib. *bCom ldan 'das Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i dkyil 'khor gyi cho ga*, 『世尊無量寿智のマンダラ儀軌』, Toh.No. 2146),

さらに今回取りあげるジターリの三部作等がある。このうち、初めの三つは、ダーキニー・シディラージャ (Skt. *Dākinīsiddhirāja*, Tib. *Ma gcig Grub pa'i rgyal mo*, 以下マチク)²⁴⁾ が阿弥陀仏から授かったものであり、他方、ジターリのものは彼の師であ

ゝがなされるが、文献学的にはこの区別に重要な意味は無いという指摘もある (cf. *ibid.*, pp. 315-317)。その姿は、『初会金剛頂経』以降、一面二手で禅定印を結んだ赤色の姿で西に位置することになる。

先ずその位置付けとしては、「密教仏としての阿弥陀如来は、『金光明経』の四方四仏を経て、密教のマンダラ世界に導入されたため、「他方仏国土」である極楽を要請する必要はなくなり、むしろ「諸部族の中では」蓮華に象徴される慈悲を司り、「五仏の五蘊を配当した構成においては」表象 (Skt. *saṃjñā*) を表す赤色をし、五智のうちの妙観察智を具えた五智如来の一つとして西方に拝されることになるのである」(cf. *ibid.*, p. 58, なお「」の中は補足した)と言われている。

阿弥陀仏の禅定印については、『初会金剛頂経』における五仏の印相として無量寿が最勝禅定印となるし、『金剛頂タントラ』も継承している (cf. *ibid.*, p. 156, 199, 244 『陀羅尼集経』『理趣広経』など左右両手を胸の前で組み合わせた転法輪印を結ぶ場合もある cf. *ibid.*, pp. 199-200 ただし『幻化網タントラ』の白色、六臂三面で開蓮華印といった例外的な姿もある cf. *ibid.*, p. 289)。

阿弥陀仏の身体の色が赤であることは、「文化史的に言えば、極楽のある西方に沈む夕陽のイメージであろうか。後に、貪・瞋・癡などの煩惱が五仏と関係付けられる時、阿弥陀は、大いなる食欲の仏として赤色に描かれるが、成立の順序としては、赤色の配当が先と思われる」(cf. *ibid.*, p. 243, pp. 334-339)と言われている。

元来、阿弥陀は語源的に *amṛta* (甘露) との関係の可能性も議論されてきたが (cf. *ibid.*, pp. 53-54)、持物となる甘露瓶について、「また、教義的に、阿弥陀→無量寿という必然性から、不死 (長寿) の妙薬としての甘露が、阿弥陀・無量寿の属性、さらに進んでは、特色ある持物として、定印を結ぶ無量寿如来は、その手の平の上に甘露を満たした甘露瓶を置くことになるのである」(*ibid.*, p. 263) 等と指摘されている。cf. 田中 [1990] pp. 102-104

またチベットでは、タンカや木版画の観音と勢至を始めとする八大菩薩像が阿弥陀如来を中心として描かれており、中央に如来形の無量光、莊嚴した菩薩形の無量寿のいずれか一尊を、楼閣の中に大きく描き、阿弥陀の台座にはクジャクを描くこともあれば、極楽の蓮池から生じる蓮茎の上に阿弥陀を拝することもある (cf. 頼富 [1990] p. 635)。また「長寿三尊 (*Tshe lha rnam gsum*)」として中央に大きな無量寿仏、周囲に無量寿仏と白ターラと仏頂尊勝母を交互に配置した図像も知られている (cf. 田中 [1990] pp. 104-105)。

チベットにおける阿弥陀仏の尊容の具体的記述については note.45 を参照のこと。日本での密教的な阿弥陀仏の図像に関しては、真鍋 [2000] [2001] を参照のこと。

24) なお、マチクには、*Aparimitāyurhomavidhi* (Tib. *Tshe dpag tu med pa'i sbyin sreg gi cho ga*, ↗

るガルバパーダが阿弥陀仏から授かったものであるとされている (cf.『讃』奥書き)。前回の我々の報告 (cf. 拙稿 [2003]) においては、マチク流を受けたダライラマ七世の成就法を紹介したが、その段階ではマチク自身の著作を扱わなかったため、マチク

『無量寿の護摩儀軌』, Toh.No. 2144) という関連典籍もある。拙稿 [2003] おいて note.23 と付録 (1) において、ダライラマ七世の記述に基づきマチク流の伝承系譜を紹介したが、マチク自身については十分な検討が行えなかった。今回調査した *Hayagrivasādhana* (Tib. *rTa mgrin gyi sgrub thabs*, 『馬頭成就法』, Toh.No. 2142, Tshi.215b4-216a5) の奥書に、「無量光により授けられたダーキニー・ドゥッペーギェルモ ('Od dpag med kyiis lung bstan pa'i // mKha' 'gro Grub pa'i rgyal mo)」とある。また、*Aparimitāyurjñānasādhana* (Toh.No. 2141, Tshi.210a3-215b4) の奥書と、*Aparimitāyurjñānasādhana* (Toh.No. 2143, Tshi.216a5-219a3) の奥書には、「『根本十万タントラ』と『釈タントラ・光明網』に依って、女性成就者ギェルモがお造りになった (/ *rTsa rgyud le'u 'bum pa dang // bShad rgyud 'Od zer dra ba la // brten nas Grub pa'i rgyal mos mdzad /*)」という記述がある。これらに言及される広本の「根本十万タントラ」とその「釈タントラ・光明網」については未確認である。タントラ文献の異表記にも詳しいツルティム・ケサン先生のご意見では、十万の広本はおそらく神話上の存在であろう、ということである。

マチクの成就法文献を見ると、明妃の配置、父母仏の合体 (yab yum)、四灌頂、カパーラの所持、五甘露などに言及しており、後期密教のうち母タントラ系統の無上瑜伽タントラに属している。他方、「鼓音声ダラニ」「宗要経」そしてジターリの三部作は、最下位の所作タントラに分類される。また前回紹介したダライラマ七世のマチク流の阿弥陀仏成就法において、生起・究竟の二次第という無上瑜伽タントラ特有の内容が見られるのは、元来マチクの著作にあった要素であるが、それが性的ヨーガの陰もない観法に仕上げられているのは、ゲルク派ならではの取り扱い方であると言えよう。

クラスの異なった修法に関する混同が良くないことに関して、ケードップ・ジェは、「或る者はいふーヘーヴァジュラのような[無上瑜伽タントラの]マンダラー一の正尊と眷属[へ]の親近の[規定された]度数になったなら、他のマンダラ等の親近をする必要はなくて、灌頂等のマンダラの事業に入るので充分である。一切の尊は体が同一であるから、と言う。そのうち、自性清浄として体が同一であるからと言うのと、相続が同一であり楽空として体が同一であるからと言うのと、どちらを言っても等しいので、[彼らの見解によると、タントラの中でも広く行われている]所作タントラのジターリの無量寿九尊のようなものの灌頂を得たなら、[タントラの中でも最高の難度をもつ]無上[瑜伽タントラ]等のマンダラすべての灌頂を得たことになる。尊すべては体が同一であるから」

と批判している。cf. Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman [1968] pp. 276-277

また、マチク流の伝承系譜に関して、マチク、ティブバ、レーチュンパの間の伝法に関する記述が、ダルマバドラ作の *Grub rgyal lugs kyi tshe dpag med lha gcig bum gicg gi dbang bskur* (*dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs* 2, vol.76, *dNgu chu dha rma bha dra'i gsung 'bum*, 7a-8a) に見られる。この刊本の複写状態が良くないので読解は今後の課題としたい。なお、レーチュンパについて、拙稿 [2003] 付録 (1) における記述の出典が *Hu lan deb ther* であることがわかった (cf. 稲葉, 佐藤 [1964] p. 173)。また、*Deb ther sngon po* には次のように言う。

・「レーチュンパがインドから再帰国したときミラレバは、「インドには無身ダーキニーのその法には九つの法類があるが、尊者マルバのお言葉では「私は九つの法類のうち五つしか得ていない。今やおまえが全部インドで受けなさい」というお言葉があったので、「今レーチュンパよ、おまえがインドに住って、それら法類を全部受けなさい」と仰ったので、レーチュンパは上師のお言葉を聞いて、インドに渡ってナローとマイトリバの両者の直弟子ティブバに全部いただいた。さらに教誡を多く求めてから上師のもとに來られた。九つの法類を上師に献上した～」

cf. *Deb ther sngon po*, 四川民族出版社, 1985 年, pp. 523-524 (*The Blue Annals* Part two. by George N. Roerich, Royal Asiatic Society of Bengal, Calcutta, 1949, p. 437)

・「そのように[レーチュンパは]多くの利他をなさった。御年七十八歳に鉄の雌蛇の年に逝かれた。レーチュンパから始まった成就者ギェルモの寿命成就の歴代記 (lo rgyus) へ

流とジターリ流の成就法の区別に言及できなかったが、今回の考察では幾分なりとも明らかになったと思われる²⁵⁾。

また以前、ジターリの儀軌が「二つの無量寿経 (Tshe dpag med pa'i mdo gnyis)」²⁶⁾

には、レーチュンバが八十二 [年間, 世に] おられたと言うものもあるが、最上の直弟子たちの教えの年代計算 (bstan rtsis) を細くなくさったものには七十八 [年間] と出ている」cf. ibid., p. 526, ibid., p. 439

なお、上記のダルマバドラの著作は、「それについても、尊の形相とタントラ部の次第と、見解 (bzhed srol) の区別全てを合一したもののうち最高のものは、マチク・ドゥッペーギェルモ流の *Tshe dpag med lha gcig bum gcig* として流伝した、この無量寿を無上ユガとして行ずる [行法] である」と述べた後で、ギェルチョク・ケルサンギャンツォ (rGyal mchog bsKal bzang rgya mtsho / Dalai lama 7, A.D. 1705-1757) の名前に直接触れて、Toh.No. 5853(9)冒頭の偈頌を引用している (6b5-6)。これは、ダライラマ7世によるマチク流の継承について言及する段である。

※ Toh.No. 5853(9) *Ma gcig grub pa'i rgyal mo lugs kyi tshe dpag med la brten nas brtan bzhugs 'bul tshul gyi cho ga bsgrigs sram khregs rdo rje'i srog shing* (*The Collected Works (Gsung 'bum) of the Seventh Dalai Lama* (72,4 [36b4] -85,5 [43a5])

- 25) ジターリは、ヘーヴァジュラなど母タントラの系統にあること (cf. *The Blue Annals* Part one. by George N. Roerich, Royal Asiatic Society of Bengal, Calcutta, 1949, p. 243, 白崎 [1981a] p. 24) も予断を与える一つのきっかけになってしまったが、例えば、前回報告した (cf. 拙稿 [2003]) ダライラマ7世の伝えるマチク流の伝承と、ジターリの『讃』の奥書が伝えるジターリ流の伝承は明確に別のものである。また、両者とも寿命の成就を目的にする点、両者とも『初会金剛頂経』以降の金剛界の五如来の配置に基づきながら、それを無量寿の成就法として再構成している点は共通するが、その再構成の仕方に違いがある。すなわち、五部 (五族) の如来にすべて無量寿という称号を加えている点は同じであるが、ジターリ流はその構成を受け継いで、さらに四維に四つの徳性をもった無量寿を配置しているが、基本的に中央の大日如来という構成を残している。ところが、マチク流における五仏は、例えば、*Aparimitāyurjñānasādhana* (Toh.No. 2143, Tshi.216b5-218a1) には、中央に明妃を抱いた無量寿、東に不動無量寿、南に宝部無量寿、西に大日無量寿、北に不空成就無量寿、さらに四維に明妃として東南にマーマキー、南西にターラ妃、西北に仏眼、北東に三昧耶ターラを配置している。中央の大日が西に移動していることは、例えば『秘密集会タントラ』以降の父タントラにおいて、主催者である阿閼が東から中央に移り、大日が代わりに東へ移ったのと同様の事態である (無上瑜伽タントラにおいて阿閼族が優勢になった理由としては、事実上の本尊であるヘーヴァジュラ、サンヴァラ、グヒヤサマージャなどの諸尊はいずれも多面多臂の忿怒の姿であり、その尊格としては阿閼如来の金剛部が最適であったこと、また仏教の外的要素より内面性を重要視する傾向にあって、五如来に五蘊を配当するという構成のなかで、色蘊を配当され身体を司る毘盧遮那如来より、識蘊を配当され心の象徴となる阿閼如来に重要性が置かれたことがある。cf. 頼富 [1990] p. 320, 336)。このような事情を考えるなら、特定の目的をもった無量寿仏の成就法においても、無量寿仏が中央に位置し、毘盧遮那が西に退くことも成立するわけである。

なお阿弥陀仏を中心に据えたマンダラにも、サキヤ派バクバ (A.D. 1235-1280) が著した、*Sbyong rgyud nas gsungs ba'i Tshe dpag med kyi sgrub pa'i thabs* (*BIBLIOTHECA TIBETICA* 1-7, *The Complete Works of the Great Masters of The Sa Skya Sect of the Tibetan Buddhism*, Vol. 17, *The Complete Works of Chos rgyal 'Phags pa* -2-, 瑜伽タントラに属する『悪趣清浄タントラ』所依の儀軌書) のように、また別の構成をもったものがある。

- 26) チベットでは *Tshe mdo* の略称がよく用いられている。ロンドルラマの著作 (*The Collected Works of Londol Lama*, Part.1,2, Lokesh Chandra, International Academy of Indian Culture, New Delhi, 1973) の中に、ターラナータ作の *Tshe mdo* の註釈があるという記述を目にし、*The Collected Works of Jo-Nang rje-bTsun Tāranātha*, Reproduced from a set of prints from the Rtag-brtan Phun-tshogs-glio blocks preserved in the library of the Stog Palace in Ladak, LEH, 1985 を調査した。この名称を持つ著作を確認できなかったが、Vol.12 に *Tshe cho ga bDud rtsi'i chu gter* というジターリ流の阿弥陀仏成就法を確認できた。他に *Tshe mdo* の註釈が存在する

に言及することを指摘したが (cf. 拙稿 [2003] note.8), その詳細は明らかでなかった。今回、チベット仏教の大学匠プトン (Bu ston Rin po che, A.D. 1290-1364) の高弟ダツェパ (sGra tshad pa Rin chen rnam rgyal, A.D. 1318-1388) による *Tshe dpag med 'chi med mnga sgra'i dkyil cho ga Tshe dpal ye shes bsam 'grub* (『無量寿無死鼓音のマンダラ儀軌 一寿命の吉祥と智慧の如意成就一』, 以下『ダツェパ儀軌』)²⁷⁾ によって, 「二つの無量寿経」が「阿弥陀経」「無量寿経」ではないことは確かになり, その一つが「鼓音声ダラニ」であることは判明した。残り一つが何を指すかは, 決定的とは言えないが,

27) 可能性, ロンドラマの記憶間違いという可能性は排除できないが, この成就法のことを指していると仮定するなら, Tshe mdo とジターリの成就法の密接な関係を傍証するものになる。
27) *The Collected Works of Bu-ston*, PART 28 (SA), edited by Prof. Dr. Lokesh CHANDRA from the Collection of Prof. Dr. Raghu VIRA, International Academy of Indian Culture, New Delhi, 1971, (2, Sa.1.1-25, Sa.13a7) = Toh.No. 5233

チベットにおいては *Aparimitāyurjñānahrdaya* (「鼓音声ダラニ」) に依りマンダラ儀軌を行う伝統がある。この『ダツェパ儀軌』はその名にも関わらず, 実際には「ジターリの三部作」に多く依拠している。ジターリの三部作が個別に叙述を展開し, 重複する記述もあるのに対し, 『ダツェパ儀軌』は三部作を総合して実に詳細な儀軌にまとめたものである。こうした点に基づき『ダツェパ儀軌』を「ジターリの三部作」の参考書として利用した。なお小野田 [1987] は, ジャムヤン・ロテルワンポ (Jam dbyangs blo gter dbang po, A.D. 1847-1924) による *rGyud sde kun btus* に所載された *bCom ldan 'das 'chi med mnga lha bcu bdun gyi sgrub dkyil dbang chog dang bcas pa 'chi med grub pa'i bcud len* を扱った論文である。この「鼓音声ダラニ」に基づく儀軌書は, チョナン派の伝承に依るとされる。ibid., p. 94, note.12 には, ロテル・ワンポもジターリの『儀軌』を参照したことが述べられている。

『ダツェパ儀軌』冒頭は以下の通りである。

((2, Sa.1.1) 『無量寿無死鼓音のマンダラ儀軌 一寿命の吉祥と智慧の如意成就一』 (*'Chi med mnga sgra'i dkyil chog tshe dpal ye shes bsam 'grub*) と言われるもの。ラマと教主無量寿智に敬礼します。

何かに依ってひたすら (2, Sa.1.2) 帰依すれば, / 生死涅槃のあらゆる衰退から保護され, / 解脱・福利・安樂の吉祥に結びつけなされる, / ラマ・教主無量寿に敬礼します。

この著作を多くの学者・行者が明らかになさったけれども, / 他の者が (2, Sa.1.3) 促すゆえに, / 劣った知性の私も [著作を] 決意しました。/ それゆえ, 誤りがありましたらお忍び下さり, / 精華が衆生の吉祥として成就しますように。

『無量寿無死鼓音』の門から自他の死を欺くこと (*'chi ba blu ba*) と, 寿命と (2, Sa.1.4) 智慧の悉地を成就するよう願う人が行う次第における, 以前に修念したものの区別と, マンダラに基づく行いの二つに基づいて一)

『ダツェパ儀軌』末尾は以下の通りである。このような著作の奥書きの通例として, 勧請者の個人名が読みこまれていると思われる。参考のために不完全ながら仮訳しておく。

((25, Sa.13a5) 当典籍は, 種族の功德の吉祥さによって威光があり, / 寿命と智慧の園林の吉祥である, / 資財の広大な者によって勧められて, / 比 (25, Sa.13a6) 丘ダツェパ (sGra tshad pa, プトンの弟子) が著述しました。その善により無死の金剛によって / 死主, 阿修羅, 魔の軍を滅してから / 無死甘露の吉祥さについて自在を得た / 一切智の無死の力が成就しますように。

『無量寿の無死の鼓音のマンダラ儀軌 一寿命の (25, Sa.13a7) 吉祥と智慧の如意成就一』と言われるこの [典籍] は, クシャンチェンポ・ター (sKu zhang chen po Ta) という司徒の指示によってお願いした折に, 壬戌 (chu pho khyi) の年 (A.D. 1382) の昂月 (蔵暦 9 月 16 日 ~ 10 月 15 日) の 9 日の日中, [シャル寺近郊の] 法の榮んな土地 (Chos gnas chen po) であるリブ (Ri phug) [寺] において [ダツェパが] 著し, [それを] 筆受した者はリンチェン・ベルサン (Rin chen dPal bzang) である)

『ダツェパ儀軌』においては「宗要経」が重要な役割を果たすことから、「宗要経」と「鼓音声ダラニ」が「二つの無量寿経」である可能性が強まった (cf. notes.56, 73)。

このような「鼓音声ダラニ」の系統にあるジターリ流の、所作タントラに属する阿弥陀仏成就法は、純粹に頭教の「無量寿経」に基づいたツォンカパ (Tsong kha pa Blo bzang grags pa, A.D. 1357-1419) の *bDe ba can gyi zhing du skye ba 'dzin pa'i smon lam Zhing mchog sgo 'byed* (「最上国開門」)²⁸⁾ と、無上瑜伽タントラのマチク流の成就法との間にあって、チベットでの阿弥陀仏信仰の大きな流れを形成することとなったのである²⁹⁾。

翻訳 1

Aparimitāyuhstotra (『讃』)³⁰⁾

(D.Nu.66b3) インド語で *A pa ri mi tā yur sto tra*。チベット語で *Tshe dpag med la bstod pa*。

広大な法輪を転じ、衆生のあらゆる苦しみを一瞬に除く仏³¹⁾無量寿に (D.Nu.66b4) 敬礼します。

金剛サッタから生じ、あらゆる罪過からあなたは解脱して、金剛身を具えた持金剛たる金剛無量寿に敬礼します。

煩悩の汚れによって普く汚染されず、憐れみによって愛する様³²⁾を示される蓮

28) 後にゲルク派が広まったモンゴルでは、「普賢行願讃」や「最上国開門」に基づく阿弥陀仏信仰が盛んになった。cf. 嘉木揚 [2002] [2003]

29) チャンキヤ 1 世, ドットゥブチェン・リンポチェ 3 世, ミパンらは「鼓音声ダラニ」を引用し、無量寿仏と西方極楽世界の存在を知らせ、称名によって往生すると説く箇所を引用している (cf. 梶濱 [2002] pp. 186-187, 262-263, p. 307, 437-438 etc.)。ミパンは同じく「鼓音声ダラニ」を引用し、極楽往生のために信が必要であることを特に強調している (cf. 梶濱 [2002] pp. 264-265, p. 537 etc.)。

30) 『ダツェパ儀軌』(15, Sa.8a4-16, Sa.8b3) に『讃』がそのまま引用されている。なお、無量寿九尊の配置は完全にジターリの著作に基づくものであり、マチクのものとは異なっている。(cf. note.25)

31) 以下、金剛界に属する五部 (仏部, 金剛部, 宝部, 蓮華部, 羯磨部) を列挙し、それらを無量寿仏に付しているのので、「無量寿仏」とせず「仏無量寿」等とした。

32) 原文では「chags tshul」とある。通常「Tib. chags (Skt. saṅga)」は食欲を表す用例が多いが、以下を参考に「愛する」と理解した。

jagat-saṅga-kṛtāsaṅgenāryāsaṅgenā tāyinā /

kṛtā vyākhyā mahāśāstre śrutvā nāthājitāt svayaṃ //2// (cf. 天野 [2000] p. 3)

(衆生を愛することで全てを愛する聖アサンガ・救護者によって、大論に対する釈が造られた。自ら救世者マイトレーヤから聞いて)

むろん密教では食欲も大食欲として、一切衆生に対する仏の普遍的な愛情を示すものに昇華されていく。

華無量寿に (D.Nu.66b5) 敬礼します。

思念したあらゆる事物が、一瞬に自身の思い通りに満ち足りて吉祥である、衆中の主たる宝無量寿に敬礼します。

一切の目的を、一瞬に成就し吉祥である、あらゆる思念を増益する如意 (D.Nu.66b6) 樹たる羯磨無量寿に敬礼します。

あらゆる罪過から解脱したことによって、種々なる功德で荘厳され、衆中の主たる、普見無量寿に敬礼します。

様々な偉大な力で荘厳されており、所対治の集まりを破壊する、(D.Nu.66b7) 導師、那羅延天 (Skt. Nārāyaṇa, Tib. Sred med bu) の力たる功德無量寿に敬礼します。

円鏡と平等性等³³⁾の沢山の智慧の蔵を保ち、あらゆる分別を断じた智慧無量寿に敬礼します。

分別の風によってあなたは動じず、辺を離れ三昧 (D.Nu.67a1) 寂靜であり、魔と外道の衆を滅する不動無量寿に敬礼します。

輪廻の一切衆生が、あなたの名号のみを保ったのに対して、寿命と智慧を廣大になさる無量寿に敬礼します³⁴⁾。

菩薩ジェーター (D.Nu.67a2) リ (Dze tā ri) 一敵から打ち勝った者 (dGra las rnam par rgyal ba) 一がお作りになった。

これの伝承は、アミターユス (Tshe dpag med)、成就を得たガルバパーダ (sNying po zhabs, cf. note.80)、ジェーターリ (Dze tā ri) 一敵から打ち勝った者一、大小二人のヴァジュラーサナ (rDo rje gdan pa)³⁵⁾、バリ翻訳師 (Ba ri lo tsā ba)³⁶⁾、チム・

33) ここの「me long mnyam nyid la sogs pa」は、1) 法界体性智、2) 大円鏡智、3) 平等性智、4) 妙観察智、5) 成所作智といった「大日如来の五智」を意識した表現と思われる。これら五智は通常、金剛界マンドラにおいて、1) 大日 (中央)、2) 阿閼 (東方)、3) 宝生 (南方)、4) 阿弥陀 (西方)、5) 不空成就 (北方) の五如来に配当される。五智と五如来の関係については、頼富 [1990] pp. 215-228 を参照のこと。

34) cf. 拙稿 [2003] p. 48, note. 27

この偈頌は、無量寿九尊に対する讃が説かれた後の、意味を要約した讃である。これと同じ趣旨の偈頌は『ダツェバ儀軌』の冒頭にも (6, Sa.3a6-b1) 説かれ、その重要性が伺える。すなわち「無量寿智仏 (Skt. Aparimitāyurjñāna, Tib. Tshe dang ye shes dpag tu med pa)」をマンドラの主催者とする時、「寿命と智慧を廣大になさる (tshe dang ye shes rgyas mdzad pa)」という記述は、仏自らの寿命と智慧が無量であるだけでなく、名号だけを受持する者をもそうさせる仏として、無量寿仏の特徴が先ず第一に捉えられているのである。付け加えると、尊格としての「無量寿智」が無量寿仏か否かについては古来諸説があるものの、チベット仏教では「無量寿智」を阿弥陀仏の变化身と認めるようである (cf. 田中 [1990] pp. 102-104 → note.23)。なお、無量寿智などの「宗要経」関連の仏名に関しては note.15 を参照のこと。

35) ここには「大小二人のヴァジュラーサナ」とある。大ヴァジュラーサナ (rDo rje gdan pa chen po) がニヤーヤパーラ (Nyāyapāla) 王の師であったことについては、以下を参照のこと。cf. *dPag bsam ljon bzang*, edited by Chandra Das, Reproduced by Rinsen Books, Kyoto, 1984, p. 119

ツォンドゥーセンゲ (mChims Brtson 'grus seng ge)³⁷⁾, ギャナク・プクパ (rGya nag Phug pa)³⁸⁾, ウパ・サンギェブム (dBus pa Sangs rgyas 'bum), (D.Nu.67a3) ラマ・ゲディンパ (Bla ma dGe sdings pa)³⁹⁾, ラマ・サムテンサンポ (Bla ma bSam gtan bzang po) である。

翻訳 2

Aparimitāyurjñānasādhana (『成就法』)

(D.Nu.67a3) インド語で, *Ārya ā yu rdznyiā nā pa ri mi ta sā dha nam*。チベット語で *'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa'i sgrub thabs*。

聖者無量寿智に敬礼します。

輪廻の (D.Nu.67a4) あらゆる衆生の, 寿命について保護を願うので⁴⁰⁾, 聖者無量寿の成就法次第を記しましょう。

灌頂と三昧耶戒を具えた者は, 静かで心地よい場所において, マンダラ供養と沐浴をなして, 清らかな身口意の三業 (D.Nu.67a5) によって, 師 (グル) たる仏等を召喚して⁴¹⁾, 敬礼, 供養をなしつつ, 讃嘆し, 身口意によって罪を告白する (懺悔) 等 [の七支供養⁴²⁾] を行います。四無量を修習し, 一切諸法が空性であると修

36) 彼には, *sGrub thabs brgya rtsa* (「百成就法」Toh.Nos.3306-3399, P.Nos.4127-4220) と呼ばれる訳業もある。これも所作タントラの成就法である (cf. Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman [1968] pp. 166-167, 高田 [1978] p. 321)。若いころアティーシャの指示でインドに行き, アモーガヴァジュラから法を受けた。後にサキャ派の第二代座主になった。彼の年代は A.D. 1040-1111, *ca.* とされている。cf. 奥山 [1995] pp. 203-204

37) チム・ツォンドゥーセンゲは, プトンの *Tshe dpag med kyi brgyud pa* にも挙げられる (cf. 本稿付録 1)。さらに彼はギャナク・プクパとともに, ターラナータ (Tāranātha, A.D. 1575-1634) の *Tshe cho ga bDud rtsi'i chu gter* にも挙げられる (cf. 本稿付録 2)。

38) 拙稿 [2003] p. 61 において, 「rGya nag Phug pa」を「中国のプクパ」と理解したが, ツルティム・ケサン先生の御指摘では, 中国人であるならば「rGya nag pa」になるはずであり, この名はチベットの地名や氏族名にもあるので, 単に「ギャナク・プクパ」とする。なお, ターラナータ (A.D. 1575-1634) の *Tshe cho ga bDud rtsi'i chu gter* はジターリ流の阿弥陀仏成就法を伝える典籍であるが, そこには「rGya zhang Phug pa」とある (cf. 付録 2)。*The Blue Annals* (Part one, by George N. Roerich, Royal Asiatic Society of Bengal, Calcutta, 1949, pp. 126-127) によれば, これらサキャ派の人はニンマの法にも関わっていたようである。

39) cf. *The Blue Annals* (Part one, by George N. Roerich, Royal Asiatic Society of Bengal, Calcutta, 1949, pp. 444-445)

40) P.Nyu, 81b8 では「tshe nyams pa la bsrung 'dod pas」(寿命の衰えについて保護を願うので) とある。

41) 『ダツェバ儀軌』には, 「(3,Sa.2a2) 極楽から, 無量寿九尊の智慧マンダラのラマが本尊 (3,Sa.2a3) の部主としてお坐りになり, 数え切れない仏・菩薩・自明者が取り巻いているのを, 面前の虚空の領域に「ヴァジュラ・サマジャハ (Skt. vajra samajah)」[と唱えること] によって召喚すると思念しなさい〜」と, 極楽から無量寿九尊を招くことを明記している。

42) 「七支供養」については, 拙稿 [2003] pp. 52-53 を参照のこと。

習をなして⁴³⁾、[以下の] 真言の内容を修習すべきです。

「オーン、スヴァバーヴァ、ヴィ (D.Nu.67a6) シュッダッハ、サルヴァダルマーハ、スヴァバーヴァ、ヴィシュッドー、ハン (Skt. om svabhāva viśuddhaḥ sarvadharmāḥ svabhāva viśuddho haṃ)。オーン、シュー ンヤター、ジュニャーナター、ヴァジュラ、スヴァバーヴァ、アートマコー、ハン (Skt. om śūyatā jñānatā vajra svabhāva ātmako haṃ)」⁴⁴⁾ [と修習します]。

⁴⁵⁾ 空の性質から蓮華と、月 [輪] 上にあるまさに心のフリーヒ (hrīḥ) を、赤珊瑚色⁴⁶⁾ の如く念じて、光明が放射し、再び収斂したことによって、聖者・尊者無

- 43) 空の修習と自己に本尊を生起させることについて、『タントラ概論』には所作タントラに関して、

「離一多などの中観の証因に依って、自己の心は自性による成立について空であるとしてよく決断してから修習するのが、我の真実である。それから修習されるべき本尊の真実と我の真実が無差別であり、無自性であることを修習するのが、本尊の真実である。その二つの真実は、六 [種] 本尊の中では真実の本尊であり、[所作タントラより] 上のタントラ部の「自性 (Skt. svabhāva)」[という真言] と「空性 (Skt. śūyatā)」[という真言] 等を唱えて空性を修習することに相当するものである」

という。ここでジターリは両方とも行っているわけである (cf. Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman [1968] pp. 158-161, 高田 [1978] p. 316)。チベットでは最下位の所作タントラに自己に本尊を生起する修習はなく、ただ前方に修習した本尊から悉地を得るのみであるという見解が多かったが、ツォンカバ、ケドゥップは所作タントラにもそれがあることを主張している (cf. 高田 [1978] pp. 229-244, 318-324)。ちなみに「本尊の慢 (lha'i nga rgyal)」(本尊としての自負、自覚) について、拙稿 [2003] note.43 において誤字を見逃し、「本尊の蔓」としてしまった。この言葉に関して『真言道次第大論』(Peking No. 6210, Dza.56a1-2) には、「威儀すべてにおいて本尊の明瞭の現れと本尊の慢により、凡俗の慢を滅することができのを得るべきである。ゆえに、本尊の身の形相が浮かんだのを心に受持するのみでは充分ではなくて、慢を堅固にしてからそれを心に受持することの二つが必要である」という (cf. 高田 [1978] p. 292)。

- 44) 『ダツェバ儀軌』には、ここに説かれる真言について以下の説明がある。

(4,Sa.2b1) 展開すれば (spro na)、初めに供物、功德水と洗脚水を奉獻します。終わりに音楽も奉獻します。讃嘆によって (4,Sa.2b2) 称讃します。それから合掌して心をつくして、「三宝に私は帰依致します」を始めとして、七種 [供養] を行って、「オーン、ヴァジュラ、ムフ (Skt. om vajra muḥ)」と唱えつつ、弾指によって (se gol gtogs pas) 衆の依処であるマンダラが (4,Sa.2b3) 自性住に来るよう祈願します。四無量を修習して、福德資糧を積みます。それから、「オーン、スヴァバーヴァ、シュッダッハ、サルヴァダルマーハ、スヴァバーヴァ、シュッドー、ハン (Skt. om svabhāva śuddhaḥ sarvadharmāḥ svabhāva śuddho haṃ)」と唱えることによって、一切諸法が自 (4,Sa.2b4) 性について空であると修習します。「オーン、シュー ンヤター、スヴァバーヴァ、アートマコー、ハン (Skt. om śūyatā svabhāva ātomako haṃ)」といった [真言] によって、その空も智慧金剛を自性とする自身の心以外に成立しないと修習して、智慧資糧を積み (4,Sa.2b5) ます。その空の性質に基づいて、パン [字] (Skt. paṃ) から種々の蓮華、その中央にあるア [字] (Skt. a) から月輪、その上にある自身の心性である、赤色で長音とヴィサルガを伴った文字フリーヒ (Skt. hrīḥ) を修習します。それから無量の光明が (4,Sa.2b6) 十方に放射します)

また「自性清浄の真言」と「空性の真言」については高田 [1978] p. 505 に指摘されている。

- 45) チベットにおいては菩薩形と如来形の阿弥陀仏の尊容が見られるのは (cf. 田中 [1990] p. 103)、それぞれ密教と顕教の阿弥陀仏像を反映している。『成就法』の説く阿弥陀仏の尊容は、『儀軌』(D.Nu.68a1 ~) にも説かれる。この他に、以下の典籍にも類似例が見られる。なお『成就法』『儀軌』と特に類似する例には「◎」をつけた。↗

量寿は赤色の御体であり、光明が (D.Nu.67a7) ぎっしり集まり、一つの御顔、二本の御手、禪定印 [を結び]、結跏趺坐でいらっしゃり、笑みを有し、[無] 量の光 ('od dpag) によって美しい。智慧 [サッタ] が溶け込みました。灌頂を堅持すべき

- ↘ • 'Od dpag med kyi sgom bzlas (cf. [1994] *bDe smon phyogs bsgrigs*, stod, p. 137)
 • Go rams bSod nams seng ge'i *bDe smon* (cf. *ibid.*, p. 204)
 • mKhas grub Rāgāśya mdzad pa'i *rNam dag bde chen zhing gi smon lam* (cf. *ibid.*, p. 217)
 • mChog gyur bDe chen gling ba'i *bDe smon* (cf. *ibid.*, p. 258)
 (通常、阿弥陀仏の印相は「禪定印」であるが、ここには「施無畏印」とある)
 • Zhe chen rGyal tshab kyi *bDe smon* (cf. *ibid.*, p. 267)
 • rDor rje snang ba mtha' yas kyi *sgrub thabs* (cf. *ibid.*, p. 303)
 ◎ 'Od dpag med kyi tshe sgrub (*BIBLIOTHECA TIBETICA* 1-10, *The Complete Works of the Great Masters of The Sa Skya Sect of the Tibetan Buddhism*, Vol.10, *The Complete Works of Ngor chen Kun dga' bzang po* -2-)
 (A.29, 237a5) 空の性質から、自身の住居を西方極楽国土界に転じ、[その] 面前にある、種々なる宝 (A.29, 237a6) 座の蓮華と月 [輪] の上において、瞬時に無量寿勝者は 一赤色の御身体、一つの御顔、二本の御手で禪定印をなされた上に、不死の智慧の甘露が満ちた鉢を持っており、御頭は肉髻を (A.29, 237b1) 具えており、梵行者の装束をしており、喜んだ御顔を持っており、光明で荘厳され、御衣装は法衣・袈裟を具え、金剛結跏趺坐で坐っておられ～)
 • 'Od dpag med kyi tshe sgrub (*BIBLIOTHECA TIBETICA* 1-5, *The Complete Works of the Great Masters of The Sa Skya Sect of the Tibetan Buddhism*, Vol.15, *The Complete Works of Pandita Kun dga' rGyal mtshan*, (Na.12, 224a4-5))
 • sByong rgyud nas gsungs ba'i *Tshe dpag med kyi sgrub pa'i thabs* (*BIBLIOTHECA TIBETICA* 1-7, *The Complete Works of the Great Masters of The Sa Skya Sect of the Tibetan Buddhism*, Vol. 17, *The Complete Works of Chos rgyal 'Phags pa* -2-, (Pha.1, 33b2-3))
 • *Tshe dpag med kyi sgrub thabs zab mo* (*ibid.*, (Pha.3, 35b5-6))
 • *Tshe dpag med gyi bstod pa padmo phreng ba* (*ibid.*, (Pha.5, 37b1-2))
 • 'Od dpag med kyi sgo nas sdig pa sbyong ba'i thabs (*ibid.*, (Pha.7, 39a2-3))
 • *Tshe dpag med la bstod pa* (*ibid.*, (Ba.22, 273a5-6))
 ◎ *Tshe dpag med 'chi med rnga sgra'i dkyil cho ga Tshe dpal ye shes bsam 'grub* (*The Collected Works of Bu-ston*, PART 28 (SA), edited by Prof. Dr. Lokesh CHANDRA from the Collection of Prof. Dr. Raghu VIRI, International Academy of Indian Culture, New Delhi, 1971, (4,Sa.2b6 ~) etc.)
 ◎ *Ma gcig grub pa'i rgyal mo lugs kyi tshe dpag med la brten nas brtan bzhugs 'bul tshul gyi cho ga bsgrigs sram khregs rdo rje'i srog shing* (*The Collected Works* (Gsung 'bum) of the Seventh Dalai Lama Blo-bzang-bskal-bzang-rgya-mtsho, Reproduced from a set of prints from the 1945, 'bras-spungs blocks from the library to the Ven.Dhardo Rimpoche by Lama Dodrup Sangye, Gangtok, 1976, (74,1 [37b1] ~))
 ◎ *mGon po tshe dpag med kyi sgrub thabs* (*ibid.*, (104,1 [52b1] ~))
 ◎ *mGon po tshe dpag med par brten pa'i dngos grub sgrub thabs* (*ibid.*, (42,5 [21b5] ~))
 インドにおける阿弥陀仏の尊容については note.23 を参照のこと。
 46) cf. *Bod rgya tshig mdzod chen mo* (蔵漢大辞典) 民族出版社, 1985 年, pp. 1887b-1888a
 [byu ru] rin po che'i rigs te / mdog dmar po dang nag po / dkar po bcas gsum mchis / ~
 (珍宝の種類。赤色と黒色と白色等の三つがある。～)
 上記の説明では、赤、黒、白の三色が説かれている。ここでは、阿弥陀仏の尊容色である赤色が妥当すると考えた。(cf. note.23)
 『ダツェバ儀軌』の供養讃嘆の段階では
 「(10,Sa.5b5) それから他の五色の彩色を他の典籍に出ているようにすべきです。～白の大日・無量寿、青の阿閼・無量寿、赤の蓮華・無量寿、(10,Sa.5b6) 黄の宝・無量寿、緑の羯磨・無量寿たちをフリーヒ (Skt. hrīh) から生起します。～」と通常の金剛界五仏の色彩のままである。しかし、後の聖者供養の段階においては無量寿九尊は収束して、

です。疲れない限りは、修習したり、この真言を唱えます。「名前の真言 (ming gi sngags)」と (D.Nu.67b1)「心呪の真言 (snying po'i sngags)」⁴⁷⁾です。名前[の真言]によって転変したなら、ダラニも唱えます。ダラニとは『無死鼓音声 [ダラニ] (*Chi med rnga sgra*)』です。後で[行者]本人は寿命が延びるでしょう。または刹那[に自己を]本尊だと思念して、適宜、「三真言 (sngags gsum)」⁴⁸⁾を唱えたり、瓶の甘露水の流れによって、[行者]本人を何度も洗浄すると (D.Nu.67b2) 念じたり、

↘ 転変して、「(13,Sa.7a4) 誰もが赤色の御身体で、赤珊瑚の色を有しており、(13,Sa.7a5) 赤色の光が充満しており～」となっている。

- 47) 「心呪の真言」について、『ダツェバ儀軌』(6,Sa.3b3-4) は以下のように解釈している。
(読誦すべき真言とは、「オーン、ナモ、ブルン、アーユル・ジュニャーナ、フリーヒ、アローリカ、フーン、フリーヒ (Skt. om̐ namo bhrum̐ āyurjñāna hrīḥ arolīka hūṃ hrīḥ)」という心呪の真言である)

この真言はマタクの著作 (Toh.No. 2143) にも説かれる。

- 48) この「三真言 (sngags gsum)」の二つを本作に見られる以下の真言と理解した。

- ・名前の真言 (D.Nu.67b4)

「オーン、タッドヤター、アバリミターユル・ジュニャーナ、フリーヒ、フーン、ブルン、スヴァーハ (Skt. om̐ tadyathā aparimitāyurjñāna hrīḥ hūṃ bhrum̐ svāha)」

- ・心呪の真言 cf. 『ダツェバ儀軌』(6,Sa.3b3-4)

「オーン、ナモ、ブルン、アーユル・ジュニャーナ、フリーヒ、アローリカ、フーン、フリーヒ (Skt. om̐ namo bhrum̐ āyurjñāna hrīḥ arolīka hūṃ hrīḥ)」

しかし残り一つを我々は明確には理解できなかった。しかしブトンは、上記以外の阿弥陀仏に関する真言を *Gsang sngags rgyud sde bzhi'i gzungs rnams gcig tu bsdus pa'i gZungs 'bum chen mo* (Toh.No. 5170) に四つ収録している。この中に残り一つの真言が含まれている可能性がある。

1. *Tshe dpag med kyi snying po'i sngags* (無量寿の心呪の真言)

(*The Collected Works of Bu-ston*, PART 16 (MA), edited by Prof. Dr. Lokesh CHANDRA from the Collection of Prof. Dr. Raghu VIRA, International Academy of Indian Culture, New Delhi, 1969 = Toh.No. 5170 (226))

「Om vajrāyuh hūṃ ā / Om puṇye puṇye mahāpuṇye / aparimitāyurpuṇye jñānasambharopacite svāhā / Om namo bhagavate aparimitāyurjñānasuviniścitatejorājāya tathāgatāya / arhate samyakṣambuddhāya / tadyathā / Om puṇye puṇye mahāpuṇye aparimitapuṇye aparimitapuṇye jñānasambharopacite / Om sarvasaṃ[s]kāraparīśuddhadharmamate gaganasamudgate svabhāvaviśuddhamahānayaparivāre svāhā //」(「宗要経」が説くダラニである。cf. 池田 [1916] p. 552)

2. *Tshe dpag du med pa'i mdo'i sngags* (無量寿経の真言)

(ibid. = Toh.No. 5170 (227))

「Om namo bhagavate aparimitāyurjñānasuviniścitatejorājāya / arhate samyakṣambuddhāya / tadyathā / Om sarvasaṃskāraparīśuddhadharmamate gaganasamudgate svabhāvaviśuddhe mahānayaparivāre svāhā //」

(上記真言の部分)

3. *Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po'i sngags* (無量寿智の心呪の真言)

(ibid. = Toh.No. 5170 (228))

タイトルや、ここに説かれる真言からして、「鼓音声ダラニ」の真言であることは確かである。しかし、梵本を参照できなかったため、蔵語表記から梵語表記への翻刻は見合わせた。H. Takaoka, *A Microfilm Catalogue of the Buddhist Manuscripts in Nepal*, Vol.1, Nagoya, 1981, CH539 に基づき、塚本、松永、磯田 [1989] p. 123 は「*Aparimitāhrdaya*」を挙げているが、これが「鼓音声ダラニ」に相当するかは未確認。↗

さらに讃嘆しながら祈願したので、お食事によって諸尊を供養する⁴⁹⁾と思念します。守護輪⁵⁰⁾を結んで寿命を成就したので、それでも死の兆しを欺く等の、師（グル）の口訣⁵¹⁾が存在するでしょう。

その福德の力によって、輪廻の六趣の者すべて（D.Nu.67b3）が、無量寿のお体を得て、断末摩を始めとする諸々の苦しみ^とを息めて、安楽を具えた者となりますように。

『聖なる寿命と智慧が無量という成就法（*Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa'i sgrub thabs*）』、軌範師であり学者であるジェーターリ（Dze tā ri）一敵から打ち勝った者（dGra las rnam par rgyal ba）一がお作りになったものが完成した。

インド（D.Nu.67b4）のパンディタであるジャムペー・ヤン（Jam pa'i dbyangs）と翻訳師チェガーヴェー・ペル（lCe dga' ba'i dpal）により翻訳された。

名前の真言とは、「オーン、タッドヤター、アパリミターユル・ジュニャーナ、フリーヒ、フーン、ブルーン、スヴァーハ（Skt. om tadyathā aparimitāyurturjñāna hrīḥ hūṃ bhrūṃ svāha）」である⁵²⁾。

翻訳 3

Aparimitāyurturjñānavidhi（『儀軌』）

4. *Yon tan bsngags pa dpag tu med pa'i sngags*（無量功德讃嘆の真言）

(cf. 塚本, 松永, 磯田 [1989] p. 123)

(ibid.=Toh.No. 5170 (285))

「namo ratnatrayāya / namo bhagavate amitābhāya tathāgatāya arhate samyaksambuddhāya / tadyathā / Om amṛte amitodbhaye amitasambhava amitavikrānte amitāgāmini gaganakīrtikare sarvvakleśakṣayam kari svāhā //」

Toh.No. 679, Ba.223a1-223a5 (=No. 851) に出典が求められる。Toh.No. 678, Ba.222b6-223a1 (=No. 867) を増補したものが Toh.No. 679 である。なお、漢訳『阿弥陀仏説呪』(T.No. 369) と親近性がある。H. Takaoka, *A Microfilm Catalogue of the Buddhist Manuscripts in Nepal*, Vol.1, Nagoya, 1981, DH341 に基づき、塚本, 松永, 磯田 [1989] p. 123 は「*Aparimitāstotra*」を挙げるが、これが当経に相当するかは未確認。

49) 『ダツェパ儀軌』(16, Sa.8b4-17, Sa.9a4) には、無量寿の諸尊と、東の持国天と南の増長天と西の広目天と北の毘沙門天という四方の守護神と怪物、龍や土地神に供養するとしている。

50) 護身と結界を意味する。

cf. *Bod rgya tshig mdzod chen mo* (蔵漢大辞典) 民族出版社, 1985 年, p. 2983a

【srung 'khor】rdzas sngags dmigs rim sogs kyi srung ba'i 'khor lo /

cf. 高田 [1978] p. 281, 316, 420, 505, 森 [1997] pp. 95-100, ツルティム, 正木 [2003] p. 94, 190, 288

51) これについて『ダツェパ儀軌』(17, Sa.9a6 ~) には、「死を欺く手段（'chi blu）」として詳説している。cf. Toh.No. 1702, 1748, 2839

52) 先に説かれる「名前 [の真言] によって転変したなら、ダラニも唱えます (ming gis bsgyur na gzungs kyang bzlas)」(D.Nu.67b1) を受けた補足説明である。この説明は、定型的な翻訳者名を始めとする奥書きの後の追記である。

(D.Nu.67b4) インド語で, *A pa ri mi tā ā yu rdznyā na bi dhi nā ma*. チベット語で, *Tshe dang ye shes dpag tu* (D.Nu.67b5) *med pa'i cho ga zhes bya ba*.

世尊無量寿智に敬礼します。

正規の真言行者は、成就する優れた場所を得ることから始めて⁵³⁾、地の小高くした所（土壇）に水を散らして、固く踏め固めて、香を塗り付けます。線をひき、絵具でマン (D.Nu.67b6) ダラ⁵⁴⁾を描きます。八葉（蓮華）と門等によって飾ります。九つの瓶⁵⁵⁾、あるいは二つ〔の瓶〕を始めとする、正規の内外の滋味によって飾ります。上については幢・傘によって飾ります。〔以下の〕五種の供物で飾ります。特に東に乳でお食事を作って、南方に魚肉の (D.Nu.67b7) お食事を奉獻すべきです。西に血を、北に酒を加持して置くべきです。南と北にある小高くした所に、「無量寿の二つの経典 (Tshe dpag med pa'i mdo gnyis)」を置きます⁵⁶⁾。それから瑜伽行者は〔身を〕洗淨して、安楽な座に坐って、師(グル)たる仏を面前にして、敬 (D.Nu.68a1)

53) ツォンカバは『真言道次第大論』に地の儀軌として、地の観察、地の希求、地の浄化、地の所得、地の守護と加持、場所と他のマンダラについて、という項目に分けて説明している。cf. 北村, ツルティム [1998] [1999] [2001]

『ダツェバ儀軌』(7,Sa.4a3～)は、「マンダラに基づく次第の所作」の項目において, *gSang ba spyi'i rgyud* (Skt. *Sarvamaṇḍalasāmānyavidhīnām guhyatantra*, Tib. *dKyi 'khor thams cad kyi spyi'i cho ga gsang ba'i rgyud*, Toh.No. 806, T.No. 897 『藏咽耶經』?) から、観察による土地の確保、加行、悟入の順序でなすべきだと言う偈頌を引いている。ツォンカバは『真言道次第大論』に同じ趣旨の偈頌を, *Mayājālamahātāntrarāja* (T.No. 490 『仏説瑜伽大教王經』) から引用している。cf. 北村, ツルティム [1998]

54) ジターリによる阿弥陀仏成就法のマンダラについては, *Maṇḍalas of the Tantrasamuccaya*, ed., Lokesh Chandra, No. 10 を参照のこと。cf. 白崎 [1981a] pp. 335(14)–334(15)

55) 儀軌で用いる「瓶」の詳細な規定について、『ダツェバ儀軌』には、
「(9,Sa.5a3) それから、瓶が準備できるならば九つ、準備できなければ二つを〔用意して〕白土で塗り飾ります。白布の両端のふさ (ras dkar po kha tshar) を傷つけないで〔瓶の〕御喉口を包みなさい。〔洒水のための〕薬 (srog ma) を「sog ma」と理解する) を白いふさで包みなさい。「オーン、タープテー、タープテー、マハータープテー、スヴァーハー (Skt. om tāpte tāpte mahātāpte svāhā)」と〔唱える〕ことによって、尊について河水を召引するよう (9,Sa.5a4) 思念し～」

とある。瓶の首を包むことについては、北村, ツルティム [2002] pp. 7-8 を参照のこと。ここでは、九瓶を、中央の仏無量寿、東の金剛無量寿、西の蓮華無量寿、南の宝無量寿、北の羯磨無量寿、北東の普見無量寿、東南の功德無量寿、南西の智慧無量寿、西北の不動無量寿に配当する。ツォンカバは「八瓶は門と間隔〔に〕と、第九〔番〕は中央に布置して～」(ibid., p. 11) と言う。

56) 『ダツェバ儀軌』は、以下のように解釈している。

((11,Sa.6a5) マンダラの西にある赤い絹に「無量寿心呪の真言 (tshe dpag med kyi snying po'i sngags)」, あるいは「名前真言 (ming gi sngags)」, あるいは諸々のダラニの何れかを書いて置きなさい。南と北に『無量寿の (11,Sa.6a6) ダラニ (Tshe dpag med kyi gzungs)』と、『無死鼓音声のダラニ ('Chi med rnga sgra'i gzungs)』を心地よい座の上に次第通りにおきます。東に軌範師自身が修行の助けとなる者をつれて外と内の洗淨を行います)

この記述によると、「無量寿の二つの経典 (Tshe dpag med pa'i mdo gnyis)」は、『無量寿のダラニ (Tshe dpag med kyi gzungs)』と『無死鼓音声のダラニ ('Chi med rnga sgra'i gzungs)』である。

礼し、帰依し、罪を告白（懺悔）すべきです。〔生じた功德を〕廻向し、四無量を修習して、空性を修習すべきです。それから現われたブルン (bhrum) [字] を思念して、転変によって無量宮⁵⁷⁾ [になった] と思念すべきです。それから蓮華の上にある、フリーヒ (hrīḥ) 字から生じた仏無量寿 (D.Nu.68a2) — 赤色のお体、温和なお顔、禅定 [印を結んだ] お手にある瓶で特徴づけられている者 — その本尊として自己を生ずるべきです。智慧 [サッタ] が溶け込んで、灌頂し、加持しました。心臓のフリーヒ (hrīḥ) 字から光明が放射します。衆生、仏あらゆる者を浄化すべきです。それから、月 [輪] 上にある赤いフリーヒ (hrīḥ) 字から、次の「秘密真 (D.Nu.68a3) 言 (gsang sngags)」が取り巻いていると思念します。「オーン、ナモー、ブッダン、アーユル・ジュニャーナ、フリーヒ、アローリカ、フーン、フリーヒ (Om̐ namo buddham̐ āyurjñāna hrīḥ arolika hūṃ hrīḥ)」⁵⁸⁾ と [唱えて] 白いものを思念します。さらに「ダラニの長い真言 (gzungs kyi sngags rings)」⁵⁹⁾ を思念します。それから、マンダラを成就すべきです。空の性質からブルン (bhrum) [字] を思念して、それから無量宮を思念します。⁶⁰⁾ それから (D.Nu.68a4) 蓮華と日 [輪] 上に仏無量寿を思念します。東に金剛無量寿⁶¹⁾、西に蓮華無量寿、南に宝無量寿、北に羯磨無量寿、北東に普見無量寿、東南に功德無量寿、南西に智慧無 (D.Nu.68a5)

57) cf. Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman [1968] pp. 174-177, 高田 [1978] pp. 325-326
『ダツェパ儀軌』には無量宮を始めとするマンダラに関して詳細な記述が見られる。sNgags rim (真言道次第論, Peking ed. No. 6210, Dza.11a4-7) には「真言乗 (Skt. mantrayāna)」の語義説明として—

「乗は、ここに欲する果とこれによって欲する因の乗とがあって、〔赴く〕から乗である。果は、全く浄らかな住処・身・受用・業との四つであり、〔順次に〕仏陀の宮殿と身体と円満 (円浄) と事業である。そのさまに順じて、現在から無量宮と本尊の輪と供養の資具と器・有情 [世間] などの所作があるものと修習するから、果の乗である。果の行相と一致して修習して赴くからである」cf. 高田 [1978] pp. 121-122

58) ここの「オーン、ナモー、ブッダン、アーユル・ジュニャーナ、フリーヒ、アローリカ、フーン、フリーヒ (om̐ namo buddham̐ āyurjñāna hrīḥ arolika hūṃ hrīḥ)」中の、「ブッダン (buddham̐)」と「ブルム (bhrum̐)」を交代させれば、『ダツェパ儀軌』の伝える「心呪の真言」(6, Sa.3b3-4) となる。

59) 『ダツェパ儀軌』(cf. note.56) と、notes.66, 73 の検討からは「宗要經」の真言と考えられよう。

60) 以下の無量寿仏の異名は『讃』の記述と一致する。

61) 東に不動無量寿でなく金剛無量寿が配置されているが、元来『小品般若波羅蜜經』系統に阿閼如來の東方の妙喜国を継承して、金剛界マンダラでは東方は不動 (阿閼) 如來となるべきである。ここでは、すでに『大日經』『蘇悉地經』以来、顕著な中央に如來部 (仏部)、東に金剛部、西に蓮華部という強力に確立されていたもの (たとえば後期密教の『秘密集会タントラ』においても五部族のなかでも如來部、蓮華部、金剛部がそれぞれ身・語・意の三業に配当されるような支配的な構造となっているという。頼富 [1990] p. 336) にしたがって、部族の名である東の金剛部から金剛無量寿となっているようであり、その代わりに不動 (阿閼) は西北に移動するという便法を採っている。このような異動は、たとえば『大日經』自体にさえ見られるのであり、章によっては北方に不動如來が置かれたり、『金光明經』以来の鼓音如來が置かれたりするので、註釈者がその会通に苦勞するようである (cf. ibid., p. 115, pp. 150-158)。

量寿、西北に不動無量寿 [がいらっしゃり]、全て赤色で、穏やかな顔で、禪定印 [を結び] 瓶で特徴づけられていると思念すべきです。智慧 [サッタ] が溶け込んで、灌頂、加持をします。または瓶、無量宮、本尊無量寿を思念します。(D.Nu.68a6) 心臓に「長い真言 (sngags rings)」を置いて唱えます。または『心呪 (sNyung po)』⁶²⁾ を置いて唱えます。それから新しい紅砂碗 (Skt. śarāva, Tib. kham phor) の中を、病人等の体を洗って [その] 水で満たして東に置きます。そこで「忿怒明王真言 (khro bo'i sngags)」⁶³⁾ を唱えます。古い泥像 (tsha tsha) を黒い土と混ぜて、偉大な死主の (D.Nu.68a7) 姿 — ハスタ等の量を具えたもの⁶⁴⁾ — を作ります。それは、口を下にして、上には羊毛と木綿、あるいは絹を掛けます。南の方角に向けて置いて、その近くに、赤い絹にダラニの諸句を書いたり、または「忿怒明王真言」を書いて置きます。北には種々の内衣 (D.Nu.68b1) を、五色の羊毛の糸でくるみなさい。吉祥草の上に置くべきです。それから軌範師を護るべきであり、供養し、お食事を献上すべきです。軌範師へ親近して、[真言] 蔓の旋回の仕方 (phreng ba 'khor tshul) を唱えることを始め、成就すべき者を瓶の中に思念して、⁶⁵⁾ 一人の弟子は (D.Nu.68b2) 南に坐って、『無量寿のダラニ (Tshe dpag med pa'i gzungs)』⁶⁶⁾ を読誦

62) 『ダツェパ儀軌』(18,Sa9b2-3) は、「心呪 (snying po)」を『無死鼓音声のダラニ ('Chi med nga sgra'i gzungs)』と理解している。

((18,Sa.9b2) マンダラの北の方 (18,Sa.9b3) に成就すべき者の替身の衣を五種の彩色したもので十字形に結び、『無死鼓音声のダラニ ('Chi med nga sgra'i gzungs)』を一回唱えて、その彩色した糸を魚の煙でいぶします)

63) cf. 高田 [1978] p. 283, 497

「忿怒明王真言 (忿怒甘露軍荼利真言)」は、『蘇悉地經』(T18,616b) に説かれる真言である。

64) 「ハスタ (Skt. hasta, Tib. khru gang)」とは人間の肘の長さのこと。約 46cm とされる。『ダツェパ儀軌』(17,Sa.9a6-7) には、死主について、「古い仏塔の土と、焼き場の灰、陶器の灰、黒い樹脂等を混ぜた死主の黒い姿、水牛の首をして、右に生首のついた白い杖、左は黒い絹索を持った者～」と説明する。

65) 『ダツェパ儀軌』には、以下の説明がある。

((18,Sa.9b2) それからマンダラの南方で『無量寿のダラニ (Tshe dpag med kyi gzungs)』を一回唱えることと、その黒い台の上に、升秤・分等のそれぞれの贈り物を投じましょう。マンダラの北の方 (18,Sa.9b3) に成就すべき者の替身の衣を五種の彩色したもので十字形に結び、『無死鼓音声のダラニ ('Chi med nga sgra'i gzungs)』を一回唱えて、その彩色した紐を魚の煙でいぶします。それら二つに対して「百」等と [ジタリは] お説きになっているが、[この儀軌の] 実践 (lag len) に際しては、成就すべき者の年令を望みつつと思われる。(18,Sa.9b4) 年令の数か溶ける。そして、心臓の形をした食事を半分に分けて、黒色の方に五つの灯火を燃やします。成就すべき者の沐浴した水、あるいは紅砂碗 (kham phor) を共にかの死主の面前に置きます。～)

なお、弟子の人数や役割については、北村、ツルティム [1999] p. 7 を参照のこと。

66) 『ダツェパ儀軌』には、Tshe dpag med kyi gzungs として挙げられている。先に「無量寿の二つの経典 (Tshe dpag med pa'i mdo gnyis)」(D.Nu.67b7) とあり (cf. note.56)、この中の一つに挙げられることから、『無量寿のダラニ』は独立典籍として理解されていたのは確かである。ブトン『カンギュル目録』『タントラ目録』には、このタイトルでは掲載されていないため、確定とまでは言えないが、「宗要経」の可能性がある。cf. note.73

しながら、[読誦] 一回につき華を黒い死主の上にまきなさい。このように、百 [回] あるいは二十 [回] 等、詳細・簡略、随意に加行すべきです。一人 [の弟子] は、北で『心呪』⁶⁷⁾ を読誦し、[読誦] 一回につき糸を着色して、魚の薫香を (D.Nu.68b3) その度献上し、その数も上 [記] と同じです。それから軌範師のお食事すべてを、「一般の本文 (spyi gzhung dag)」⁶⁸⁾ によって加持してから、各自の場所に献上すべきです。その後、病人を面前にして、お供え ('brang rgyas)⁶⁹⁾ の半分に油を塗って、五つの吉祥蔓を置くべきです。灯火を一杯にして (D.Nu.68b4) 死主を、南方において捨てるべきです。水と乳を混ぜた中で、着色した糸を病人にからめて、「心呪の真言 (snying po'i sngags)」[を唱えること] により武器でもって [糸を] 切って、北方に捨てます。それから、軌範師は沐浴して、心地よい座に坐って、瓶を次第通りに灌 (D.Nu.68b5) 頂します。「オーン、ヴァイローチャナ・アーユルジュニャーナ、シッディ、サマヤ、アビシンチャ、フーン (om vairocana āyurjñāna siddhi samaya abhiṣiṅca hūṃ)」[と唱えます]⁷⁰⁾。中央の本尊の灌頂によって、罪障が清まって、寿命が増長すると思念します⁷¹⁾。

身体に大日如来が寿命を灌頂し、
息子よ、あなたは死主から解放されて、
千劫にわたって寿命が増長して、
殺生罪が浄まりますように。⁷²⁾

67) cf. note.62

68) *gSang ba spyi'i rgyud* (Skt. *Sarvamaṇḍalasāmānyavidhīnām guhyatantra*, Tib. *dKyl 'khor thams cad kyi spyi'i cho ga gsang ba'i rgyud*, Toh.No. 806, T.No. 897 『藏呬耶經』?) という特定の典籍の可能性もあるが、何れにしても密教の一般的な本文に依るものであろう。

69) cf. *Bod rgya tshig mdzod chen mo* (蔵漢大辞典) 民族出版社, 1985 年, p. 1987a

「'brang rgyas」bzo lta mi'i snying kha lta bu'i gtor ma zlum po / (形が人の心臓のような球形の食物)

cf. *A Tibetan-English Dictionary*, London, 1881 「'brang rgyas」*Mil.* sacrifice, offering of estates.

70) 『ダツェバ儀軌』には、

「(23,Sa.12a4) オーン、ヴァイローチャナ、アーユルジュニャーナ、シッディ、サマヤ、フーム (om vairocana āyurjñāna siddhi samaya hūṃ)。ヴァジュラ、アビシンチャ (Skt. vajrābhiṣiṅca) と唱えつつ、飲ませます。同様に、身体に金剛の寿命を灌頂し、金剛の寿命と唱える。身体に蓮華の寿命を (23,Sa.12a5) 灌頂し、蓮華の寿命と唱える。身体に宝の寿命を灌頂し、宝の寿命と唱える。身体に羯磨の寿命を灌頂し、羯磨の寿命等と～」と、『儀軌』とほぼ同じ真言が説かれている。真言内の「vairocana」の箇所順に、「vajra」「padma」等を置換して唱えると思われる。

71) 『ダツェバ儀軌』には、「(23,Sa.12a2) 輪廻の無始以来積まれた罪障と (23,Sa.12a3) 特に他を殺生することによって、積んだあらゆる短命の業障を清め～」とある。

72) 『ダツェバ儀軌』(23,Sa.12a3-4) に、この偈頌が引用されている。

と (D.Nu.68b6) 言って、または、ダラニについては、「六波羅蜜のガーター (phar phyin drug gi tshig bcad)」⁷³⁾ を唱えます。[中央の大日無量寿の次は] 東を始めとする次第によって、金剛を始めとする名前に [順次] かえて、五瓶 [五族に配当される] で灌頂すべきです⁷⁴⁾。全ての維 (mtshams) の瓶の水を、カルマ瓶の中に集めるべきです。[その水で] 病人等は沐浴すべきです。それから、その水をこぼさず (D.Nu.68b7) に、大河、あるいは池の水域に捨てたならば、必ず死を回避したことになります。その後、弟子は師 (グル) に施物を献上し [師 (グル) から三昧耶] 戒を受けて、師 (グル) は弟子の頭頂に次の「金剛決定句」⁷⁵⁾ を唱えます。

私は智慧無量寿である。

全てに対する輕慢を捨て (D.Nu.69a1) なさい。

73) ここに説かれる「六波羅蜜のガーター」は、『ダツェバ儀軌』(23,Sa.12a5-6) には「布施の力によって、仏はまさしく優れている。／人獅子が布施の力を了解する。／大悲を具えた宮城に入ったならば、布施の力の音声が広まるでしょう。／(sbyin pa'i stobs kyi sangs rgyas yang dag 'phags // mi yi seng ge sbyin pa'i stobs rtogs te // snying rje can gyi grong khyer 'jug pa na // sbying pa'i stobs kyi sgra ni grags par 'gyur /)」という「宗要経」末尾六偈の第一偈を挙げて、「布施が究竟し寿命も増長しますように。同様に、六波羅蜜に適応した吉祥な諦力を述べます」と、寿命を六波羅蜜と結びつけて、その成就を祈念している。蔵訳「宗要経」の相当箇所は、Toh.No. 674, Ba.215b7-216a4 と、Toh.No. 675, Ba.220a6-220b3 であり、ダツェバが挙げたものは、前者に一致する。なお、ジターリの「ダラニについては、六波羅蜜のガーターを～」という記述について、ダツェバは梵語のダラニではなく、前掲の蔵訳を用いた。直前に「心呪」が、ここでは「ダラニ」が言及され、ダツェバは前者を『無死鼓音声のダラニ ('Chi med rnga sgra'i gzungs)』と理解し (cf. note.62, 65)、後者については「宗要経」から引用している。また、ダツェバは「二つの無量寿経」(cf. note.56) を『無死鼓音声のダラニ ('Chi med rnga sgra'i gzungs)』と『無量寿のダラニ (Tshe dpag med kyi gzungs)』としている。よって、ダツェバは前者で「鼓音声ダラニ」を、後者で「宗要経」を指示していることになる。

以下、参考までに「六波羅蜜のガーター」を掲載する (cf. 池田 [1916] pp. 556-557, T.No. 936, p. 84c, T.No. 937, p. 86b-c)

dānabalena samudgatabuddhaḥ / dānabalādhigato narasimhah,
dānabalena ca śrūyati śabdaḥ / kāruṇikasya pure praviśataḥ. (1)
śīlabalena samudgatabuddhaḥ / śīlabalādhigato narasimhah,
śīlabalena ca śrūyati śabdaḥ / kāruṇikasya pure praviśataḥ. (2)
kṣāntibalena samudgatabuddhaḥ / kṣāntibalādhigato narasimhah,
kṣāntibalena ca śrūyati śabdaḥ / kāruṇikasya pure praviśataḥ. (3)
vīryabalena samudgatabuddhaḥ / vīryabalādhigato narasimhah,
vīryabalena ca śrūyati śabdaḥ / kāruṇikasya pure praviśataḥ. (4)
dhyānabalena samudgatabuddhaḥ / dhyānabalādhigato narasimhah,
dhyānabalena ca śrūyati śabdaḥ / kāruṇikasya pure praviśataḥ. (5)
prajñābalena samudgatabuddhaḥ / prajñābalādhigato narasimhah,
prajñābalena ca śrūyati śabdaḥ / kāruṇikasya pure praviśataḥ. (6)

74) 『ダツェバ儀軌』(24,Sa.12b2-3) には、「軌範師 (ジターリ) の典籍には明らかに出ていないが、ラマたちの祝福をなさることによって、八つの吉祥物をアムリタ (Skt. amṛta) によって洗浄します」と述べた後、病の平癒から語句灌頂 (四灌頂の第四) までの成就を祈る祈願の偈頌を置いている。

75) P. nges bzung, D. nges gzung とある。試訳においては、デルゲ版の nges gzung (Skt. avadhāraṇa) を採用した。その場合、「金剛決定 (印可, 印持, 決了) 句」となる。

偉大なる死主を私は減したので、
息子よ、あなたは寿命の悉地を得ました。⁷⁶⁾

こう〔師（グル）は〕言って、弟子は平生の身体を思念して、心臓の蓮華の根本に、中央に大日無量寿、四方に四族を思念すべきであり、頭頂に智慧（D.Nu.69a2）無量寿を思念することで、本人の心臓から勧請したので、甘露水の流れが溢れ、五族が〔行者の〕頭頂に来て、全てが甘露に融解（zhu）してから、体中⁷⁷⁾ 全てに満ちたと思念します。『無量寿のダラニ』も読誦します。このように、二度、三度行うべきです。（D.Nu.69a3）それから、供養はお去りになるべきです。終わりにわずかな泥像を施します。土の顔料等を水に捨てて⁷⁸⁾、享受（Skt. upayukta）⁷⁹⁾ することによって、死主を減します。『無量寿のダラニ』も唱えます。

軌範師ジェーターリ（Dze tā ri）一敵から打ち勝った者（dGra las rnam par rgyal ba）一が、バラモン⁸⁰⁾ のアーカーシャ・ダートゥ／アーカーシャ・ゴーシャ（Skt. Ākāśadhātu / Ākāśaghoṣa）⁸¹⁾ の息子のために造りになったものが完成した。インドの和上のシュリー・マンジュ（Skt. Śrīmañju）と翻訳師チェガーヴェー・ペル（lCe dga' ba'i dpal）により翻訳された。

76) 『ダツェバ儀軌』（25,Sa.13a3）にも、この偈頌が引用されている。ただし、「寿命の悉地」が「寿命の持明〔者の位〕（tshe yi rig 'dzin）」となっている。

77) Plus nang, D.lung nang とある。ここで説かれる表現は定形句（lus nang thams cad khyab par bsam）であり、北京版の読みを採用した。推測ではあるが、チベット文字「s」の右半分が欠落して「ng」になったと思われる。

78) 『ダツェバ儀軌』には、「(25,Sa.13a4) 諸々の顔料を拭き取って、海へと流れる河に捨てます。(25,Sa.13a5) 紐の跡を拭き清めて、〔マンダラ儀軌の〕事業の痕跡を見えないようにすべきです。その後で廻向し、誓願し、讃辞を廣大にすべきです」とある。

79) P. nye bar 'kho bas, D. nye bar 'khor bas（近くを廻って）とある。試訳においては、ペキン版の「'kho」の派生形を踏まえて、nye bar mkho ba（skt. upayukta）と訂正して仮訳した。

80) cf. 鈴木学術財団 [1963] pp. 175-177, 寺本 [1928] pp. 313-315

『ターラナータ仏教史』には、バラモンでありながら真言仏教を並修するガルバパーダ（『讃』奥書きに登場）の姿が描かれている。そこには、彼の息子という設定でジターリが登場する。こうした関係と一致するものとして、『讃』奥書き「ガルバパーダ→ジターリ」がある。

「シャムパーラ王が、バラモンのガルバパーダに「秘密集会（Guhuyasamāja）」の灌頂を願った。王は御布施として、彼に自身の妻等を献上した。後日、その妻との間に優れた息子（ジターリ）が生まれた。彼は七歳の時にバラモン書を勉強するため学舎へ赴くが、他のバラモンの子供たちから「お前は悪い種族である」と言われ打たれた。そこでその訳を問うと、「お前の父親は仏教の真言者（nang pa'i sngags pa）なのでシェードラの尊者の首座におかれる。供養した際に〔人々を〕種族の貴賤の区別なく合わせたから（趣意）」等々とある。

81) D.Nam mkha'i dbyings, P.Nam mkha'i dbyang とある。デルゲ版では Skt. Ākāśadhātu, 北京版では Skt. Ākāśaghoṣa となる。

(付録1) プトンによるマチク流の阿弥陀仏に関する成就法伝承系譜

• *Tshe dpag med kyi brgyud pa* (14.4-6) Toh.5170 (24)

オーン, アーハ, 無量寿智 (Āyurjñānāparimita) に帰命します。フーン。

オーン, アーハ, ダーキニー・シディラージャ (Dākinīsiddhirāja = Ma gcig Grub pa'i rgyal mo) に帰命します。フーン。

オーン, アーハ, ヴァジュラキールティ (Vajrakīrti = Ras chung rDo rje grags pa, 1083/1084-1161) に帰命します。フーン。

オーン, アーハ, ボーディヴァジュラ (Bodhivajra) に帰命します。フーン。

オーン, アーハ, ギェルチェ・ラトナマハー (rGyal che Ratnamahā) に帰命します。フーン。

オーン, アーハ, ラマ・サンユルバ (Bla ma bZang yul ba) に帰命します。フーン。

オーン, アーハ, ヴィールヤシンハ (Vīryasīṃha = mChims Brtson 'grus seng ge)⁸²⁾ に帰命します。フーン。

オーン, アーハ, クマーラシディ (Kumārasiddhi) に帰命します。フーン。

オーン, アーハ, ボーディプラジュニャー (Bodhiprajñā) に帰命します。フーン。

(cf. *The Collected Works of Bu-ston*, Part 16 (MA), edited by Prof. Dr. Lokesh Chandra from the Collection of Prof. Dr. Raghu Vira, International Academy of Indian Culture, New Delhi, 1969 (= Toh.5170(24)))

82) ツォンドゥー・センゲは『讃』の奥書きにも登場する。彼がサンユルバ (bZang yul pa) から無量寿成就法を授かったという記述については、以下を参照のこと。
cf. *Deb ther sngon po*, 四川民族出版社, 1985年, pp. 870-871 (*The Blue Annals* Part two. by George N. Roerich, Royal Asiatic Society of Bengal, Calcutta, 1949, p. 744)

([ツォンドゥー・センゲは] 子どものときから厭離が強烈だったので、昼夜に右邊 (bskor ba) 等の善に努めた。十三歳の時、上師ツァリレーパ (Tsa ri ras pa) のところで出家した。「おまえは有情を利益するだろう。法に精進することになろうから、名をツォンドゥー・センゲ(精進獅子)と付ける」仰った。上師は親近する暇もなく亡くなられた。それから軌範師セク (Sregs) に法を多く聞いた。十七歳の時に[法の]講説をして法を自ら掲げた。それからスントンレーパ (Sum ston ras pa) に断 (gCod) の法類 (cf. 西岡 [1978] p. 35, etc.) を広く伺った。施しによっても[師を]喜ばせた。[師は]「おまえに依ってこの断は広まるだろう」と授記もなさった。上師ウマバ (dBu ma pa) からヘーヴァジュラなどを伺った。サンユルバは成就者であるといつて、[彼から]無量寿の灌頂を七日間いただいたので、「おまえは秋に死ぬであろうが、この灌頂により延命するだろう。秋の穀物が黄色くなる時、おまえは今回死ななかったことはとても幸福だということになるだろう。私と無量寿との両者の加持により、延命されたのだ。今は三十歳になるまで人に教えるな。その後に無量寿が有情を利益するだろう」[と言われたが、]十九歳のとき具足戒をどうしても受けたいと仰った。上師パンボバ (sPang po pa) にシャンツェル (Zhang 'tshal) の法類等を伺った。御年十九歳に親教師をチューギェルチェン (Chos rgyal can) にして具足戒を受けた。～)

※ダーキニー・シディラージャ（マチク）とヴァジュラキールティ（レーチュン・ドルジェタクバ）は、ダライラマ7世の伝える伝承系譜（cf. 拙稿 [2003] 付録1）にも出る。ヴィールヤシンハ（チム・ツォンドゥーセンゲ）は、『讃』奥書き、本稿付録2にも出る。なお、大谷 No. 4888 の奥書き（P. Zu. 276b）に、ヴィールヤシンハまであり、彼の後は、ケードゥプ・チュージェ／シヨヌ・ドゥプ（mkhas grub chos rje / gZhon nu grub）、シャントン・チュージェ・オセル（Zhang ston Chos rje 'od zer）、チャンチュプ・シェーラプ（Byang chub Shes rab）、ラマ・プンニヤラージャ？／ソナム・ギェルツェン・ベルサンポ（Bla ma Puṇyarāja / bSod nams rGyal mtshan dpal bzang po）、ケーツウン・サンギェー／シヨヌ・ソナム（mKhas btsun Sangs rgyas / gZhon nu bSod nams）である。ケードゥプ・チュージェについては、Don rdor dong bsTan 'dzin chos grags [1993] pp. 341-342 を参照のこと。サキヤ派の人で、ヴィールヤシンハの弟子である。

（付録2）ターラナータによるジターリ流の阿弥陀仏に関する成就法伝承系譜

ターラナータ（Tāranātha, A.D. 1575-1634）作 *Tshe cho ga bDud rtsi'i chu gter*（校定者添書「ジターリによって伝えられた成就法に関する長寿の灌頂を授与する方法」）の末尾にはジターリ流の阿弥陀仏成就法の伝承系譜（プトン含）がある。山口 [1982] に指摘があるように、ターラナータの所属したチョナン派（Jo nang pa）は、教義（他空説）の大成者トルプバ（Shes rab rgyal mtshan, A.D. 1292-1361）がプトン（Bu ston Rin chen grub, A.D. 1290-1364）によって哲学的見解の面から激しく批判されている。しかしその一方で、例えばマチク流（cf. 拙稿 [2003] 付録1）の阿弥陀仏成就法の伝承者の一人バラバ（rGyal mtshan dpal bzang, A.D. 1310-1391 → 'Brug pa bKa' brgyud 系）は、先のトルプバとプトンという哲学的見解の対立する双方から教えを受けたと称している。また、後のチョナン派を代表するターラナータも哲学的見解の対立にも関わらず、過去の継承者として「Bu ston chen po（偉大なプトン）」の名前を挙げている。また『讃』末尾の系譜の箇所では指摘したように、彼ら以前のギャナク・プクパ等のサキヤ派の人はニンマの法にも関わっていたようである。このように、哲学的見解の対立や宗派には関係なく、広く阿弥陀仏成就法は伝承され実践されていたことがわかる。

・ *Tshe cho ga bDud rtsi'i chu gter* (20, a6-b1)

この伝承は、バリ [翻訳官] 以前は前（cf. 『讃』奥書き）と同じである。[以後]

チム・ツォン [ドゥー] セン [ゲ] (mChims rTson seng / mChim Brtson 'grus seng ge = Virryasiṃha), ギャシャン・プクパ (rGya zhang Phug pa →ジターリ『讃』では rGya nag Phug pa, cf. note.38), ジェーパ・シェーラプリンチェン ('Jad pa Shes rab rin chen), エーパ・コントン (E pa 'Khon ston), ジャムヤン・シートクパ ('Jam dbyangs bZhi thog pa), チャムセム・ギェルイェー (Byang sems rGyal ye), ラマ・ダクパペルサン (Bla ma Grags pa dpal bzang), ラマ・チュウーパク・ギェルツェン (Bla ma Chos 'phags rgyal mtshan), ヤンツェーパ・リンチェンセンゲ (Yang rtse ba Rin chen seng ge), プトン・チェンポ (Bu ston chen po), チューギェル・ナムケーツェンチェン (Chos rgyal Nam mkha'i mtshan can), チュージェー・リンチェンペルドゥプ (Chos rje Rin chen dpal grub), クーシャン・キェンラプチュージェ (sKu zhang mKhyen rab chos rje), クーシャン・ソナムチョクドゥプ (sKu zhang bSod nams mchog grub), ドクカンパ・ゴンドゥプギェルツェン ('Grog khang pa nGon grub rgyal mtshan), チャンリンバ・タシギェルツェン (Byang gling ba bKra shis rgyal mtshan), ラマダムパ・ペルデンチューサン (Bla ma dam pa dPal ldan chos bzang), 彼(前者)によって私(ターラナータ)に [伝えられた]。

(cf. *The Collected Works of Jo-Nang rJe btsun Tāranātha*, Volume12, Reproduced from a set of prints from the Rtag brtan Phun tshogs gling blocks preserved in the library of the Stog Palace in Ladak, 1985)

※バリ翻訳官以前は、アミターユス、ガルバパーダ、ジターリ、大小二人のヴァジュラーサナの順である (cf.『讃』奥書き)。

(付記) 執筆にあたり、大谷大学・ツルティム・ケサン先生には詳しい御教示を頂いた。佛教大学・小野俊蔵先生には、研究会等を通じて御助言を頂いた。ここに謝意を表します。

[参考文献] (年代順)

- ・[1912] 仏書刊行会編『大日本仏教全書』(『阿婆縛抄』2)
- ・[1916] 池田澄達「梵本アバリミターユル陀羅尼經の校合」(『宗教研究』1-3)
- ・[1928] 寺本婉雅『ターラナータ印度仏教史』丙午出版社
- ・[1943] 渋谷慈鑑編『天台座主記』第一書房

- ・[1949] George N. Roerich, *The Blue Annals*, Royal Asiatic Society of Bengal, Calcutta
- ・[1963] *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in India propagatione* (復刊叢書2), 鈴木学術財団
- ・[1964] 稲葉正就, 佐藤長共訳『フッラン・テプテル ―チベット年代記―』法蔵館
- ・[1968] Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman, *Mkhas grub rje's Fundamentals of the Buddhist Tantras*, Hague
- ・[1971] 『浄土宗全書』7, 山喜房仏書林
- ・[1971] 『浄土宗全書』15, 山喜房仏書林
- ・[1974] 白崎顕成「Jitāri の Anekāntavāda 批判」(『印度学仏教学研究』22-2)
- ・[1974] 芳村修基『インド大乘仏教思想研究』百華苑
- ・[1976] 白崎顕成「Jitāri と Mokṣākaragupta」(『印度学仏教学研究』25-1)
- ・[1977] 白崎顕成「Jitāri と Mokṣākaragupta と Vidyākaraśānti」(『印度学仏教学研究』26-1)
- ・[1978] Kenjo SHIRASAKI, *Jitāri and Śāntarakṣita*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* Vol. 27, No. 1
- ・[1978] 高田仁覚『インド・チベット真言密教の研究』密教学術振興会
- ・[1978] 西岡祖秀『トゥカン『一切宗義』シチュ派の章』(『西藏仏教宗義研究』2, 東洋文庫)
- ・[1979] 小野田俊蔵「チベット撰述の浄土教仏典」(『佛教大学大学院研究紀要』7)
- ・[1979] 白崎顕成「Jitāri と Nāgārjuna」(『印度学仏教学研究』28-1)
- ・[1980] 越智淳仁「プトンの論疏部目録― [1] 〈礼讃部〉 ―デルゲ, 北京版論疏部目録とテキストの書名, 奥書とを対照して―」(『高野山大学論叢』15)
- ・[1980] 白崎顕成「Jitāri の『無量寿九尊法』について」(『仏教論叢』24)
- ・[1981] 小野田俊蔵「ツォンカバ造『最上国開門』試訳 ―チベットに於ける本願思想受容の一例として―」(『仏教文化研究』27)
- ・[1981a] 白崎顕成「Jitāri, 一人と思想―」(『木村武夫教授古稀記念 僧伝の研究』, 永田文昌堂)
- ・[1981b] 白崎顕成「Jitāri と Śāntideva と Prabhākarakīrti」(『印度学仏教学研究』29-2)
- ・[1981] 西岡祖秀『『プトン』目録部索引1』(『東京大学文学部文化交流施設研究紀要』4, 別冊)
- ・[1982] 西岡祖秀『『プトン』目録部索引2』(『東京大学文学部文化交流施設研究紀要』5, 別冊)
- ・[1982] 山口瑞鳳「チョナンパの如来蔵説とその批判説」(『田村芳朗博士還暦記念論集 仏教教理の研究』, 春秋社)
- ・[1983] 小野田俊蔵「チベット所伝の浄土観想修法 ―青木文教師将来資料 Nos.103, 104, 107, 108, 109 についての管見―」(『国立民族博物館研究報告』別冊1)
- ・[1983] 白崎顕成「Jitāri の『普遍実在論批判』」(『仏教史学研究』26-1)
- ・[1983] 西岡祖秀『『プトン』目録部索引3』(『東京大学文学部文化交流施設研究紀要』6, 別冊)
- ・[1984] 西岡祖秀「ベリオ蒐集チベット文『無量寿宗要経』の写経生・校勘者一覧」(『印度学仏教学研究』33-1)
- ・[1984] 御牧克己「大乘無量寿宗要経」(牧田諦亮, 福井文雅編『講座敦煌』7, 大東出版社)

- ・ [1984] edited by Chandra Das, *dPag bsam ljon bzang*, Reproduced by Rinsen Books, Kyoto
- ・ [1985] 西岡祖秀「沙州における写経事業 ―チベット文『無量寿宗要経』の写経を中心として―」(牧田諦亮, 福井文雅編『講座敦煌』6, 大東出版社)
- ・ [1985] 山口瑞鳳「官文書と公文書」(牧田諦亮, 福井文雅編『講座敦煌』6, 大東出版社)
- ・ [1985] *Deb ther sngon po*, 四川民族出版社
- ・ [1985] *Bod rgya tshig mdzod chen mo* (蔵漢大辞典) 民族出版社
- ・ [1987] 小野田俊蔵『『阿弥陀鼓音声陀羅尼経』に基づく西藏曼荼羅』(『日本仏教学会年報』52)
- ・ [1988] 白崎頭成「Jitāri の菩提過犯懺悔註菩薩学次第 (Bodhyāppatideśanāvr̥ttibodhisattvaśikṣākrama) 研究 1.」(『神戸女子大学紀要文学部篇』21-1)
- ・ [1989] 斎藤昭俊, 李載昌編『東洋仏教人名事典』新人物往来社
- ・ [1989] 白崎頭成「Jitāri の菩提過犯懺悔註菩薩学次第 (Bodhyāppatideśanāvr̥ttibodhisattvaśikṣākrama) 研究 2.」(『神戸女子大学紀要文学部篇』22-1)
- ・ [1989] 塚本啓祥, 松永有慶, 磯田熙文編『密教經典篇』(『梵語仏典の研究』4), 平楽寺書店
- ・ [1989] Helmut Eimer, *Der Tantra-Katalog des Bu ston im Vergleich mit der Abteilung Tantra des tibetischen Kanjur* (Indica et Tibetica 17, Bonn)
- ・ [1990a] 白崎頭成「Jitāri の菩提過犯懺悔註菩薩学次第 (Bodhyāppatideśanāvr̥ttibodhisattvaśikṣākrama) 研究 3.」(『神戸女子大学紀要文学部篇』24L)
- ・ [1990b] 白崎頭成「Jitāri の Bodhicittotpādasamādānavidhi 研究 (1)」(『神戸女子大学紀要文学部篇』23-1)
- ・ [1990] 田中公明『詳解 河口慧海コレクション チベット・ネパール博物館』佼成出版社
- ・ [1990] 頼富本宏『密教仏の研究』法蔵館
- ・ [1993] 下田正弘『蔵文和訳『大乘涅槃経』(1)』(『インド学仏教学叢書』4), 山喜房仏書林
- ・ [1993] 武内紹晃, ツルティム・ケサン, 小谷信千代, 桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』(『浄土仏教の思想』3), 講談社
- ・ [1993] 田中公明『チベット密教』春秋社
- ・ [1993] Don rdor dang bsTan 'dzin chos grags 編, *Gangs ljongs lo rgyus thog gi grags can mi sna*, 西藏人民出版社
- ・ [1994] *bDe smon phyogs bsgrigs* (stod cha, smad cha), 四川民族出版社
- ・ [1995] 奥山直司「イコンの園へ ―パンコル・チョルテン研究序説―」(『チベット・曼陀羅の世界 ―その芸術・宗教・生活―』), 小学館
- ・ [1997] 森雅秀『マンダラの密教儀礼』春秋社
- ・ [1998] 鎌田茂雄, 河村孝照, 中尾良信, 福田亮成, 吉元伸行編『大蔵経全解説事典』雄山閣出版
- ・ [1998] 北村太道, ツルティム・ケサン「ツォンカバ著『秘密道次第大論』(3)」(『普通寺教学振興会紀要』5)
- ・ [1999] 小野玄妙, 丸山孝雄編『仏書解説大辞典 (縮刷版)』大東出版社
- ・ [1999] 北村太道, ツルティム・ケサン「ツォンカバ著『秘密道次第大論』(4)」(『普通寺教

学振興会紀要』6)

- ・[1999] 立川武蔵, 頼富本宏編『インド密教』(「シリーズ密教1」), 春秋社
- ・[1999] 立川武蔵, 頼富本宏編『チベット密教』(「シリーズ密教2」), 春秋社
- ・[2000] 天野宏英『梵文現觀莊嚴頌論釈』平楽寺書店
- ・[2000] 小野田俊蔵「西藏仏教の浄土教理解」(『現代における法然浄土教思想信仰の解明』, 浄土宗総合研究所)
- ・[2000] 真鍋俊照『密教図像と儀軌の研究 上巻』法蔵館
- ・[2001] 北村太道, ツルティム・ケサン「ツォンカパ著『秘密道次第大論』(5)」(『善通寺教学振興会紀要』7)
- ・[2001] 真鍋俊照『密教図像と儀軌の研究 下巻』法蔵館
- ・[2002] 梶濱亮俊『チベットの浄土思想の研究』永田文昌堂
- ・[2002] 北村太道, ツルティム・ケサン「ツォンカパ著『秘密道次第大論』(8)」(『善通寺教学振興会紀要』8)
- ・[2002] 嘉木揚凱朝「モンゴルにおける阿弥陀仏信仰」(『印度学仏教学研究』51-1)
- ・[2003] 落合俊典『『呪土経』と失訳陀羅尼経典について』(『佐藤良純教授古稀記念論文集 インド文化と仏教思想の基調と展開』, 山喜房仏書林)
- ・[2003] ツルティム・ケサン, 藤仲孝司『中観哲学の研究4』文栄堂
- ・[2003] ツルティム・ケサン, 正木晃『チベット密教 図説マンダラ瞑想法』(「実践講座」4), ビイニング・ネット・プレス
- ・[2003] 中御門敬教, 藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態 ―阿弥陀仏に関するドラマ七世の信仰と実践―」(『佛教大学総合研究所紀要』10)
- ・[2003] 嘉木揚凱朝「モンゴル仏教歴史的展開」(*Hoedang and Esoteric Buddhism*)